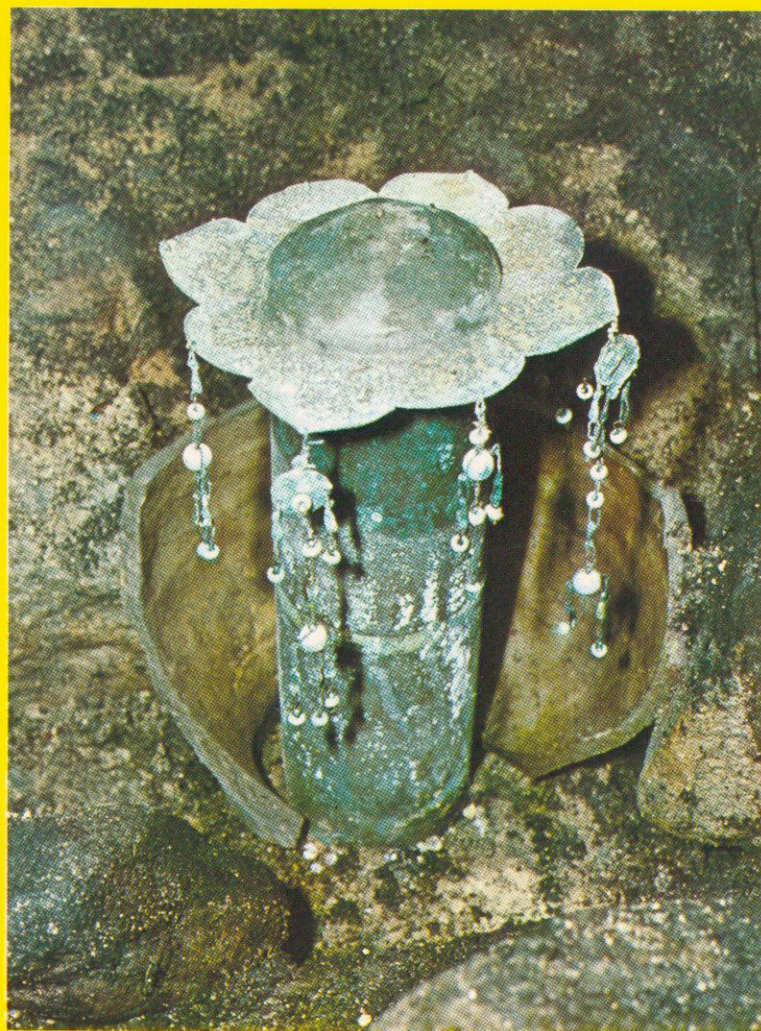


昭和四十五年二月

武藏寺經塚

武藏寺史編纂会

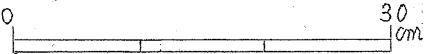
5
卷首図版



第四經塚經筒出土狀態

(1968年4月15日撮影)

武蔵寺経塚正誤表

頁	行	誤	正
序	6	最初の太宰率	最初の太宰率
図版 目次	図版 14	オ八号・オ九号・塚掘方	オ八号・オ九号経塚掘方
〃	図版 20	遺物(六)オ八経塚外筒	遺物(六)オ八号経塚外筒
挿図 目次	オ6図	(松本肇実測, 小田製図)	(松本肇実測, 小田製図)
〃	オ13図	徳永博行実測, 宮小路製図)	徳永博行実測, 宮小路製図)
〃	オ20図	九州発見の銅板及び	九州発見の銅板及び
5	8	より次のように	次のように
5	11	「邪馬台と太宰府」	「邪馬台と太宰府」
7	7	疑わしい箇所は壺掘りを	疑わしい箇所は坪掘りを
13	13	経筒一本と経巻式	経筒一本と経巻
18	6	同一固体の頸部破片が	同一固体の頸部破片が
20	13	朝顔に開く	朝顔形に開く
21	6	栗石が埋められて	栗石が埋められて
21	9	大鏡を倒立	大甕を倒立
28	5	胴部最大径径	胴部最大径
30	13	筒身に出せられるよう	筒身にかぶせられるよう
30	14	瓔珞が垂下かれ	瓔珞が垂下され
36	10	細長い頸を	細長い頸を
47	1	小田富士男	小田富士雄
オ23図	スケール		

武藏寺經塚

—— 筑前・武藏寺經塚群発掘調査報告 ——

小田 富士雄
宮小路 賀 宏

序

日本の文化は今を遡ること二千年前後から、大陸の先進文化を輸入して産業を開発し、生活を改善し、殊に精神文化の向上に努力した。この大勢は神功皇后の頃から急速に進んだ。世に云う武内宿禰の八腹の族と云う筑紫の内族の人々が其の中心的動力であつた。其の中にて蘇我氏が追々頭角をあらわし、蘇我稲目が筑紫の那津口の屯倉の設置に貢献し、又大和の大神狭屯倉の設置に力めている。蘇我氏の筑紫の土着地は日向の武蔵であつたから、後々まで蘇我氏に武蔵と號する者もあつた。蘇我の稲目の頃代々の信仰により武蔵寺を開基したのである。孝徳天皇の代、稲目の孫に当る蘇我日向が最初の太宰率として筑紫の政治を執つた時、天皇の御病の爲め般若寺を開基した。日向が武蔵寺を開いたと云うのは、日向の政治、宗教に亘る事業が盛んであつたが爲であらう。

武蔵寺は般若寺以前の筑紫の最初のお寺であつた。筑紫の最初のお寺は即ち日本最初の仏蹟であらなければならぬ。聖徳太子が建てられたと云う寺の中に日向寺と云うものがある。蘇我氏が武蔵寺を大和にも建立したのを日向寺と伝えたものであらう。

いうまでもなく仏教は大陸の先進文化将来の先達であつたのであるから、武蔵寺は筑紫に於ける大陸文化の根本的橋頭堡であつた。世人が之れを詳かにして居ないのは遺憾である。武蔵寺の史蹟として右の如き重大な意義も具体的に説明する史料はただ今の寺地があるのみで建築、彫刻、文書等の史料は全滅していると云つてよいのである。

然るに今仏天の垂示か寺内堂の山から平安時代の経筒が多く発見された。武蔵寺関係の有志の発起により、小田、宮小路二氏に託してこれが調査を懇請した。

其の後二氏の献身的盡力により、発掘調査を重ねられ、本書の如き完全な報告書の出版を見るに至った。

日本の文化発祥の根元を知らんとする者は九州の人に限らず、全国の大学、図書館其の他歴史的研究所には必ず備うべきものと信ずる。

此の経筒の発見せらるるや、現武蔵寺井上亮範住職の亡夫人純心院椿華小夜大姉が経筒発見の靈験に感激し、住職を助けて普く法悦を世にわかたんとし、写経会を武蔵寺の年中の行事として設置し、多くの法縁を集めた。序を作るに際し、一言これをここに添えることを許されたい。

昭和四十五年二月

九州大学名誉教授

長 沼 賢 海

文 本 目 次

一	はじめに	一
二	武藏寺の建立	五
三	経塚の調査	七
1	経塚の配置	七
2	第二号経塚	一二
3	第三号経塚	一四
4	第四号経塚	一六
5	第五号経塚	二一
6	第六号経塚	二四
7	第七号経塚	二五
8	第八号経塚	二六
9	第九号経塚	二八
10	第十号経塚	三一

四 総括

括 三三

1 経塚の構造と特色 三三

2 経筒について 三七

跋 四六

図版 目次

巻首原色図版 第四経塚経筒出土状態

図版第一 武藏寺附近の景観

図版第二 遺跡遠望・経塚の配置（第一～七号経塚）

図版第三 第二号経塚（出土状況の複元）

図版第四 第三号経塚

図版第五 第四号経塚（二）

図版第六 第四号経塚（二）

図版第七 第五号経塚

図版第八 第六号・第十号経塚

図版第九 経塚の配置（第八～十号経塚）

図版第一〇 第八号経塚（二）

図版第一一 第八号経塚（二）

図版第一二 第九号経塚（二）

図版第一三 第九号経塚（二）

図版第一四 第八号・第九号・塚掘方床面の床石出土状況

図版第一五	遺物(二)第二号・第三号・第五号経筒	
図版第一六	遺物(二)第四号経筒	
図版第一七	遺物(三)第八号経筒・第九号経筒・第十号経塚伴出品	
図版第一八	遺物(四)経卷	
図版第一九	遺物(五)第四号・第五号経塚外筒	
図版第二〇	遺物(六)第八号経塚外筒	
図版第二一	遺物(七)第九号経塚外筒	

挿 図 目 次

第1 図	遺跡附近地図(五万分之一「太宰府」・「甘木」分載)……………	一
第2 図	第三号経塚調査風景……………	三
第3 図	経塚配置図(小田・宮小路・黒野・徳山・綿織実測、宮小路製作)……………	八
第4 図	各地点発掘状況……………	八、九
第5 図	B地点発見の銅板製蓋(小田実測製図)……………	九
第6 図	経塚発見の土器・陶器実測図(松本肇実測、小田製図)……………	一〇
第7 図	第二号経塚構造復元実測図(渡辺正気・宮小路実測、宮小路製図)……………	一三

第8図	第三号経塚構造実測図（宮小路・黒野・徳山実測、宮小路製図）	一五
第9図	第四号経塚構造実測図（宮小路・徳山実測、宮小路製図）	一七
第10図	瓔珞復元形式図（宮小路実測製図）	一九
第11図	経筒底部の銘文実測図（宮小路実測製図）	二〇
第12図	第五号経塚構造実測図（小田・黒野実測、宮小路製図）	二二
第13図	第六号経塚石室実測図（松本肇・藤口健一・徳永博行実測、宮小路測）	二四
第14図	第七号経塚発見の和鏡片（小田手拓測図）	二五
第15図	第八号経塚構造実測図（宮小路・黒野・錦織実測、宮小路製図）	二七
第16図	第九号経塚構造実測図（宮小路・黒野・錦織実測、宮小路製図）	二九
第17図	福岡県大牟田市岩本出土の経筒と陶製外筒（小田実測、宮小路製図）	三一
第18図	第十号経塚発見の陶製外筒	三二
第19図	第十号経塚伴出遺物実測図（松本肇実測、宮小路製図）	三二
第20図	九州発見の銅板及び鋳銅製積上式経筒参考例実測図（小田実測、宮小路製図）	三九
第21図	九州発見の埴形香合参考実測図（小田実測、宮小路製図）	四三
第22図	武藏寺経塚発見経筒実測図集成（小田・宮小路実測、宮小路製図）	本文末
第23図	武藏寺経塚発見外筒実測図集成（小田・宮小路・黒野・松本実測、宮小路製図）	本文末

例 言

一、本報告書の作成にあたっては長沼賢海先生に題字と序文をいただいた。

二、本文の執筆分担は次のとおりである。

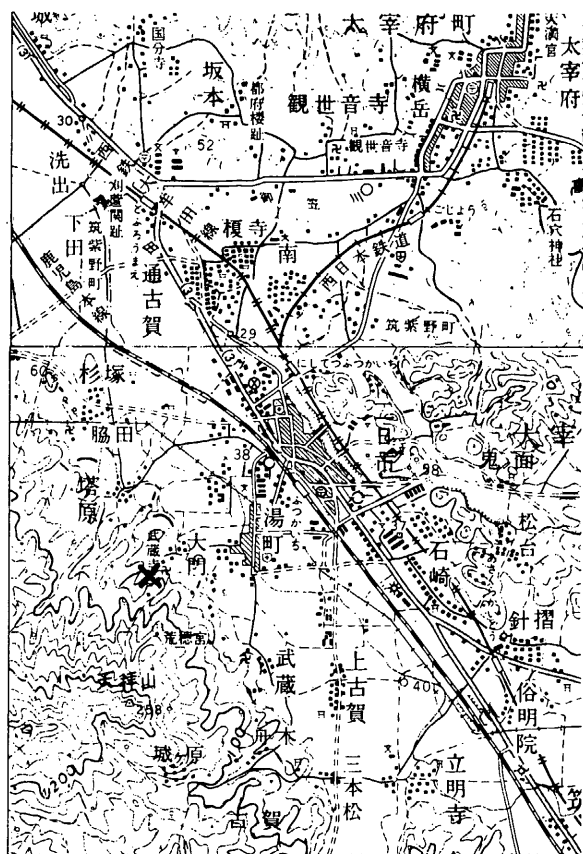
一、三の 1・3・5・6・7・10、四 小 田 富 士 雄

二、三の 2・4・8・9 宮 小 路 賀 宏

三、使用した写真は小田の撮影したものから選び、実測図の整理、浄書には主として宮小路があたり、小田が一部補足した。

四、原稿の整理、本書の編集は小田が行なった。

太宰府地方の南方 天拝山麓に在る武藏寺は、二日市温泉にまつわる伝説と、静寂な環境をしたって訪れる人があつたとたたない。古来、同寺に伝わる文化財も少なくないが、四年前に境内裏山から二個の経筒が発掘されたことで當時話題となつたのが、武藏寺境内に経塚が在ることを確認した最初であつた。このとき発見の経筒の一個には平安時代の紀年と、「武藏寺」の銘文があると伝聞しているので武藏寺経塚の性格を知る上にも、また武藏寺の歴史を研究



する上にも重要な手がかりを与えてくれるものと思われるが、現在なお所在が転々としていて本書に収録できなかったのは惜しまれる。このときの発見が正規の調査でなく盗掘によるものであったために刑事事件となつて闇に流れてしまつたのである。

昭和四十三年三月十四日、この場所ので石取りを行つていた際に、栗石の集積箇所を掘りあてて、こ

れを掘り下げて新しく四段積上式鑄銅製経筒を発見したことでにわかに注目を集めることとなった。連絡をうけて県教育委員会社会教育課の岩下光弘・渡辺正氣・宮小路賀宏の三名が現地を訪れ、関係者立会いのもとにすでに完全に掘りあげられていた経塚の複原と記録作成を行なった。その結果、この場所にはまだいくつかの経塚がある可能性が考えられるようになり、県教委ではこの場所の現状保存を武藏寺に要望された。しかしながらすでに世間の注目をあつめ、盗掘者の動向もただならぬ状態となり、さらに場所が境内裏山であるために外部から境内を通らずとも容易に立ち入れるという環境であるから、事実上、未掘のまゝに保存して監視をつづけることは不可能であった。そこで武藏寺では武藏寺護持会の関係者ならびに長沼賢海・鏡山猛・谷口鉄雄・小田富士雄らの研究者を招集して対策協議を行なった結果、この際学術的な発掘調査を行なって盗掘を防ぎ、遺物の保存をはかろうということになった。調査は昭和四十三年四月十一日から十七日までとし、発掘は小田が担当することとなった。また調査主体は武藏寺で、目下計画中の武藏寺史編纂事業の一環として実施することも確認されたのであった。そこで臨時に武藏寺経塚調査を委嘱する調査員として次の諸氏があたることとなった。

顧問 長沼賢海 九州大学名誉教授（国史学）

鏡山猛 九州大学文学部教授（考古学）

谷口鉄雄 九州大学文学部教授（美学・美術史）

調査員 小田富士雄 九州大学文学部助手（考古学） 調査主任

宮小路賀宏 福岡県教育委員会文化財係技師

徳山光 九州大学文学部助手（美学・美術史）

黒野肇 九州大学文学部研究生（考古学）

武藏寺代表 井上 亮 範 武藏寺住職・代表役員

山 田 彦太郎 武藏寺責任役員



第2図 第3号経塚調査風景

この調査によって後述の如く第三号から第七号までの経塚を発掘した。なお、第一号は四年前盗掘されたものの、第二号は昭和四十三年三月発見のものをあてた。しかしこの調査をもつてしてもなおいくつかの経塚が在ることが知られたので、改めて第二次調査を計画することとして、探索をすすめてさらに二基の存在が確認された。そこで同年九月十四日から十六日まで第二次調査を実施した。調査員は前回参加の小田、宮小路、黒野のほかには錦織亮介（九州大学文学部大学院学生・美学美術史）の参加があった。この調査では第八号から第十号までの経塚が発掘されて通算十ヶ所の経塚が確認されて、経塚の調査は完了した。

従来、経塚の学術調査の例はきわめて少い。多くは盗掘や偶然の発見に拠っているために、遺品は数多いにもかかわらず、その埋納状態を逐一学術調査によって記録することは稀であった。したがって経塚研究上渴望されていた学術調査が行なわれ、しかもそれが数例にのぼる調査例を加えることができた点で、将来の経塚研究にきわめて注目すべき基礎資料を提供したことになる。また出土した経筒自体も他に比べてもおとらない優品

を含んでいて提起する問題も多い。

武藏寺関係者の間ではさらに出土品の収蔵施設の建設、遺跡の保存整備などの対策がすすめられていると聞く。学術的にもこの記念すべき経塚調査について終始全うされようとしている武藏寺関係者各位の御努力に感謝の意を表したい。また、調査にあたって我々の御世話にあたられた武藏寺住職夫人が、本書の完成を前にして事故のため急逝された。謹んで御冥福を祈る次第である。

最後に調査中、顧問の先生方、武藏寺護持会の方々の見学、助言をいただくことが多かったが、直接発掘の手足となった次の方々にも感謝申しあげる。

松尾昇之助氏、井上義教氏、筒井初太郎氏

筑紫中央高校歴史部生徒（赤崎敏男君、藤井正紀君、三島肇君、鶴田弘己君、畠田利朗君、森永信一路君、安永克己君、山崎正司君）

また、遺物整理にあたっては、九州大学文学部考古学研究室研究生松本肇君の援助をうけるところがあった。あわせて謝意を表する。

（小田富士雄）

二、武藏寺の建立

武藏寺について、貝原篤信は『筑前統風土記』の「武藏村」の項において次のように紹介している。

武藏寺椿花山成就院と号す。本尊は薬師仏也。伝教大師、御笠郡山口村木屋町山より十二枝有山茶を切取って、此仏を刻めりと云う。此武藏寺は虎丸長者と云う者造営し、むかしは大寺にて堂塔も多く、子院七坊有しと云う。正法寺、善正寺、宗正寺、蓮花寺、地藏坊、石水坊、池上坊是也。池上坊は日蓮宗の僧、武藏国池上より来り住る所也と云う。今に其跡あり。伝説に虎丸長者此寺を造立せしとき、いまだ成就せずして死す時に武藏国池上より日蓮宗の僧来りて作り終りぬる故に武藏と号し、村の名も武藏といへりと云う。

また、石田茂作博士は筑紫郡筑紫野町所在「塔の原廃寺」について『飛鳥時代寺院址の研究』の「武藏寺」の項により次のように述べられている。武藏寺を伝教大師開基の伝説のあることから、

平安初期仏教の山間閑寂処に営まれる流行により塔の原廃寺から今の寺の東隣台地に移建され、現在の武藏寺もその位置から旧武藏寺の一支院かと思われる。

なお、武藏寺の建立について長沼賢海先生はその著書『邪馬台と太宰府』の「第十四章日本初伝の仏教、第六節武藏寺、(5)武藏寺」において次のように述べられている。

この寺は平安時代にも上方に知られていた。大江隆兼の詩にこの寺を湯寺、又は温泉道場と称している。(廓南文華の累葉の条参看) 宇治拾遺物語にも此の寺に新仏あらはるといふ話を伝へている。(中略) 一昨々年(昭和四十年)飛鳥

地方を委しく見学した際、橘寺の寺地の形勢が武藏寺によく似ている事について興味を感じた。帰来武藏寺に詣する機会があつて、改めて武藏寺境内を見直すことが出来た。即ちその概観が余りにも橘寺址に似ていることを悟つた。橘寺の丘の仏頭山、其の丘の麓にある池、寺のうしろにある橘宮の址という伝説地等悉くこれを武藏寺にうつして見ることが出来る。(中略)武藏寺を建てた伝説上の虎丸長者を歴史的人物に還現しようとすれば、先づ挙げなければならぬのは日向(上宮聖徳法王帝説の裏書にある蘇我日向臣無耶志建立の般若寺との関連がある。筆者註)であろう。或はもつと古く蘇我韓子などを考えなければなるまい。武藏寺の起源は仏教伝来の蔭げの努力家であつた内氏の一族。即ち蘇我氏の或る時代の人が創立したと見るのが最も穏当な判断であらう。武藏寺の創立の判然としないということは此の寺が仏教伝来の日本に於ける橋頭堡的遺蹟であることを思はしめるものがある。蘇我氏の氏寺建立の沿革から云へば、向原寺の前が葛城寺、其の前が石川寺である。石川寺の前が武藏寺であらう。

武藏寺の歴史を考古学的に裏付ける資料は今回調査された経塚から平安後期に位置できるが、それ以前にのぼる物は現在発見されていない。昭和四一年福岡県教育委員会主催で塔の原廢寺跡の一部が発掘調査された(福岡県文化財調査報告書第三五集「塔原廢寺」)。調査の結果蘇我日向臣無耶志建立の般若寺と考えられ、その存続は七世紀後半から八世紀初めとする結果が得られた。石田博士の云われる平安初期における移転説は時代的関連が考えられなく、また、長沼先生の説には、遺物的確証が得られていない。

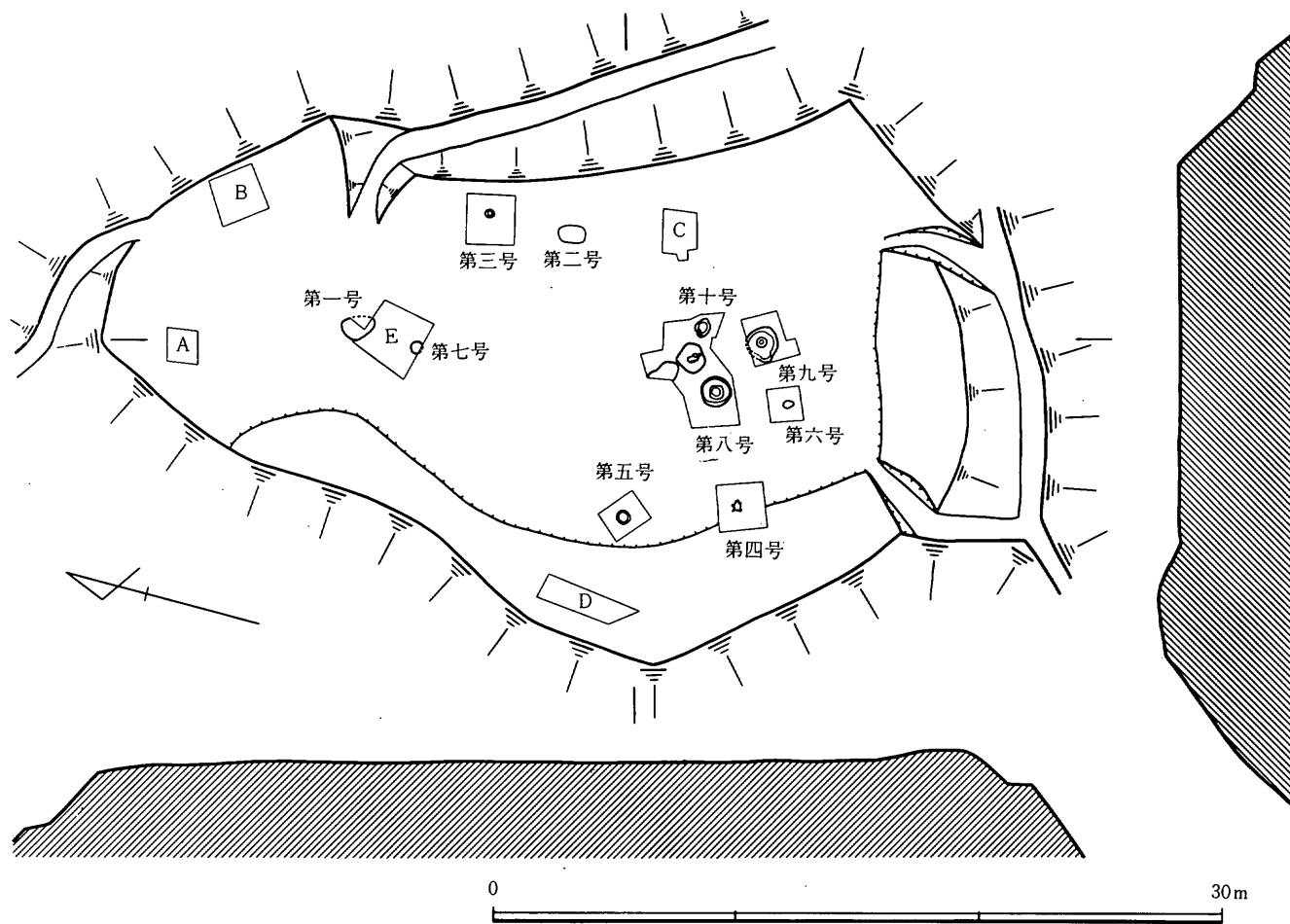
現在ではまだ、武藏寺の歴史は平安後期に存在していたこととしておくのが妥当と考えられる。武藏寺の創建については今後に残された大きな課題と云える。それには、蘇我日向臣無耶志にとらわれることなしに現武藏寺を考えてみるのも一方法かと思われる。

三、経塚の調査

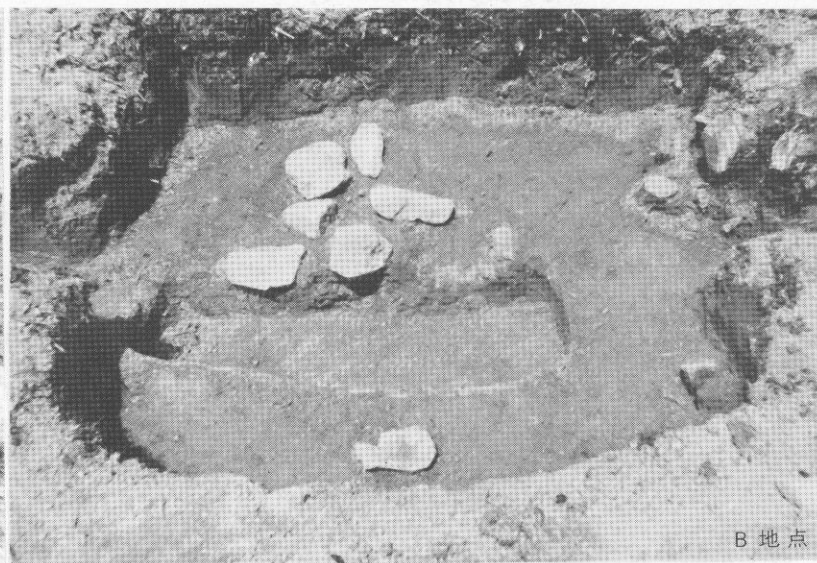
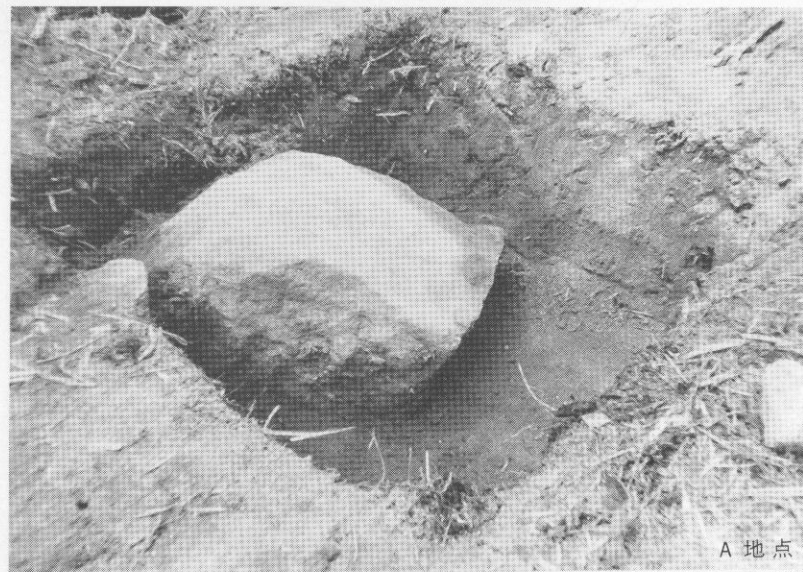
1、経塚の配置（図版第一・第二・第九）

武藏寺境内の南隅にあたる遺跡は、通称堂山と称される独立丘の頂上に在る。境内からの比高約一〇米で、頂上は南北三五米、東西二〇米ばかりの平坦面をなしている。西及び南の端は土堤状に高くなっているが、これが本来の状態であつたらしく、現在の平坦面はかなり新しい時期に整地されて表面を削った結果であるらしい。聞きこみによれば、削平した土砂を東側にかきおとして若干拡張したらしい。中央よりやや北寄りに四年前盗掘されたという第一号経塚の掘穴がのこつていて、まわりに炭灰や栗石が散乱している。

今回調査の契機となつた第二号経塚は東縁に近いあたりに在り、やや大きな石が据えられている。調査にあたつては平坦面についてボーリングを試みて探索し、疑わしい箇所は壺掘りを行なつて露出検討する方法をとつた。その結果、前後二回の発掘を通じて十箇所を経塚が確認できた。各経塚の配置は、中央部をさけて平坦地の縁辺に営造したような感をうける。東縁では第二号経塚の北三米ばかりをへだてて第三号経塚が在る。西縁では土堤状に削り残されたところに接して南に第四経塚、その北四米ばかりをへだてて第五号経塚が在る。この西縁寄りの経塚は削りのこされた表土をかぶつてゐるので最も深く発見された。ボーリングによつてもほぼ一米近い深さを示している。南縁寄りには西に第六号経塚、東に第九号経塚が二米余の間隔でならび、この北には約二米をへだてて西に第八号経塚、東に第十号経塚が間隔約二米をもつて営造されている。



第3図 経塚配置図



第一号経塚の南二米のところには盗掘された第七号経塚が発見された。

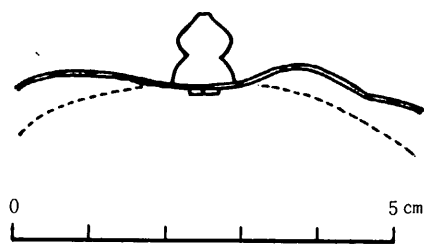
このほかボーリングによって疑わしい地点をA、E五地点選定して試掘を行なった。

A地点は北縁近くで、一米に七〇糎の大きさの花崗岩自然石の露頭がみられた。ここを発掘してみたが厚さ五〇糎の自然石がのぞいている状態であることが確かめられた。

B地点は東縁の北端にあたるところで、ボーリングによって地表下浅くに栗石の存在が知られたので露出してみたが、これらの栗石群は不自然に散乱していて、花崗岩の風化土壌から成る地山から二〇糎も浮きあがっていた。青磁碗や土師器の破片が少量発見され、木炭片も少量検出されたが、後世攪乱された状態を示していると思われる。またここからは経筒の蓋と思われる宝珠撮みのついた銅板製蓋の破片が発見されたので、これらを総合してこの地点の近くには盗掘された経塚の存在が考えられるが明確にできなかった。

C地点は第二号経塚の南三米ばかりにあたり、地表下二〇糎ほどで花崗岩の栗石十数個が平面的に散乱している。一部の栗石を除いて試掘溝を掘ってみると、栗石の下

D地点は西縁土堤上で、立木の根元に栗石数個が集まっているが、地山から二〇糎ばかり浮いていて二次的に集積したと思われる。さらに一米ばかり南にも花崗岩割石が据えられた状態で発見され、そのまわりにはこの石を支えるように花崗岩栗石が数個重なっていた。しかし割石の下には土砂が充満していて何物も発見されなかった。しかし地山より浮きあがっていて二次的集積とみざるを得ない。

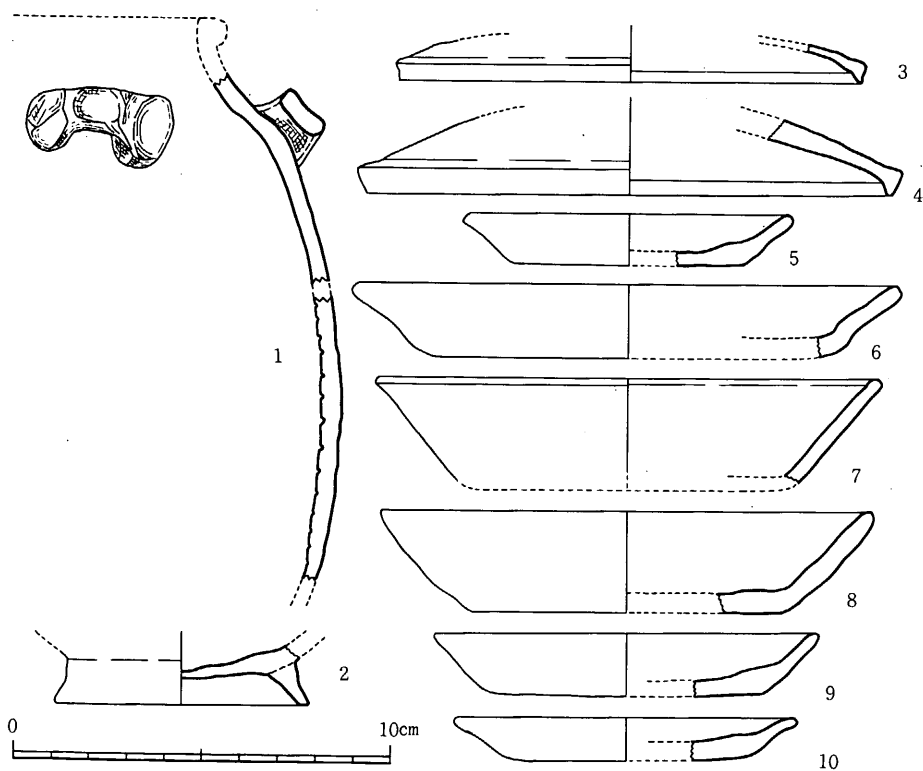


第5図 B地点発見の銅板製蓋

E地点は第一号経塚と第七経塚の間をつなぐ地点である。地表下五〇糎ほどで東西二・五米、南北八〇糎の範囲に栗石が乱雑に散布し、重なって集積している。栗石群の下には薄い炭の層が広がっていて、これが花崗岩の風化土壌から成る地山に密着している。経塚营造時の材料を集積しておった場所でもあろうかと推察したが判断しがたい。

以上のような各地点の発掘によって、表土中に混って歴史時代の須恵器、土師器の破片がいくつかが発見されている。その中には経塚以前のものも含まれているので、一応の整理をしておこう。

まず各経塚の内部や上層から発見されたものでは、第一号、第三号、第四号、第五号経塚があげられる。第一号経塚の盗掘された掘穴から炭灰と共に素焼陶質の耳付壺の破片二個が発見された。淡褐色の良質陶土でつくられた胴張り



第6図 経塚発見の土器・陶器実測図

(1・第一号経塚, 2～5・第三号経塚, 6・7・第四号経塚, 8～10・第五号経塚)

ある壺で、肩部に無造作に付けられた耳がある。この種の陶製壺は古代末期から中世にかけて当地方に屢々みうける四耳壺に類品があり、南支那方面からの移入品かと云われている。経筒或はその外筒、時には藏骨器としても発見されている。第一号経塚は銅製経筒が発見されているので、その外筒であった可能性がつよい。

第三号経塚の上層からは須惠器の蓋と土師器の皿の破片が出土している。須惠器の蓋は椀形品の蓋と思われるが、その示す特徴は奈良時代のそれで、経塚の営造とは無関係と考えざるをえない。土師器皿の破片は平安時代に比定されるもので、経塚の営造と関係あるものかも知れない。

第四号経塚の上層中からは須惠器の皿破片が発見されているが、経塚営造よりさかのぼる特徴を示している。

第五号経塚の上層中からは須惠器の高台付椀底部と土師器の小形皿破片が発見されている。須惠器の方は経塚以前のものであろうが、土師器の皿は祭祀などを考えるに適当なもので、経塚の営造と無関係ではなからう。

このように経塚の上層或は石積み直上から経塚以前のもので、経塚営造頃と思われる土師器皿の破片の二種が発見されているが、後者は経塚営造の際に供養行事などを行なった遺品であることが考えられよう。

次にA、E五地点の試掘地でもその上層中から須惠器、土師器の破片が発見されている。その大部分は前記経塚の上層中にみられたような経塚以前のもの——主として奈良時代の須惠器で椀、蓋、皿の類と、平安時代に下る土師器皿の類に大別できる。後者は経塚の時代まで下るかと思われるものも含まれている。

さらに第一次調査の後に第二次調査にさきだつて、遺跡地の上層中から発見された須惠器、土師器にはまとまった器形のものがあり、須惠器では壺の口縁が注意された。また土師器では平安時代に下る皿、杯の類で、口縁に煤の付着したものあり、燈明皿などの用途が考えられる。これらのものは経塚の時期よりややさかのぼるかと思われるものもかなりあるように見うけられる。

かようにみえてくると、遺跡地には、経塚营造以前から何らかの遺構があつたことは否定できず、おそらくその始めは奈良時代にまでさかのぼるようである。経塚以前の遺構がどのようなものであつたかを確かめることはできなかったが、立地と出土品からして、これが宗教関係の堂舎のごときのものであつたと思われる公算は大きいであろう。さらに経塚の营造時に比定できるかと思われる土師器の破片が、いずれも細片ながら少なからず発見されたことは、経塚の营造にあたつて供養業の如き行事が行われたことを示唆しており、今後の経塚調査における注意を喚起しているといえよう。

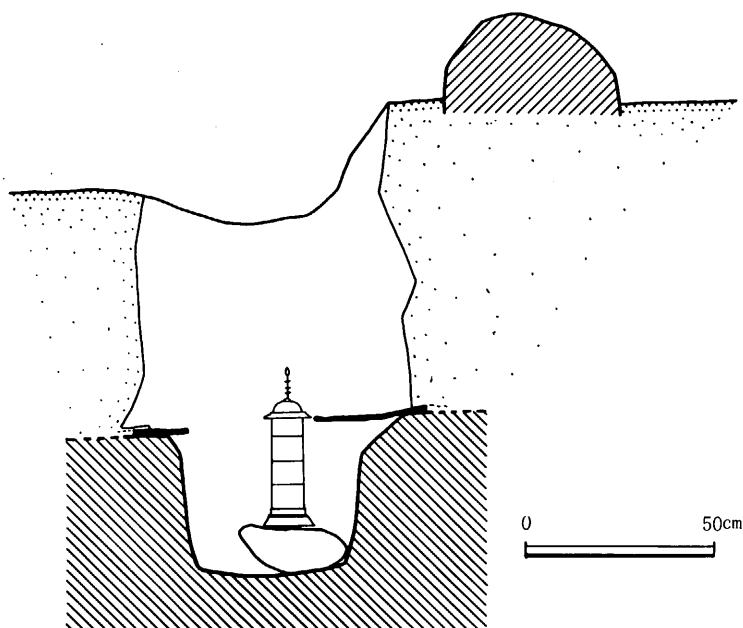
(小田富士雄)

2、第二一号 経塚 (図版第三・第一五・第一八)

この経塚は、武藏寺の庭石採集によつて偶然発見されたものである。庭石採集者は、往々にして誰れもが持つ興味心によつて遺構を完全に発掘し破かいしてしまつた。大変遺憾なことであつたが、武藏寺は事の重大さから県教育委員会社会教育課に連絡をとられた。県教育委員会は現地に赴き、発掘者から詳しく事情を聴取し、遺構の復元と復元記録作成のうえ埋戻し、遺構の保存を計つた。

遺構は、第三経塚の南方三米五〇糎に所在している。庭石として採集されようとした石は遺構中心部から東方約六〇糎にある。経塚標示石としての意味を持つものであるかについては不明である。

遺構はすでに完掘されていたために、発掘穴壁面の観察と事情聴取によつてほぼ復元することができた。



第7図 第二号経塚構造復元実測図

約七〇糎の黄色土下に地山(花崗岩・バイラン土層)があり、この地山に深さ約五〇糎、径約五〇糎の円形に穴を掘りくぼめ、底に扁平な底石を敷き、側石を立てて小石室を作り、中央に経筒を安置し、蓋石をかぶせて、さらに栗石を積み重ねて埋戻していたようである。また、地山と上層との境いに炭灰層が壁面に認められる。その深さが経筒の蓋の位置にあることから石室の内外に炭・灰が施入されていたことがわかる。

この経塚が小石室を作っていたことは、発掘者の言と、使用された石材のなかに石室を作るにふさわしい扁平なほぼ方形の石材が認められたことで明らかである。石材は全て花崗岩の自然石である。

発見された遺物は、鑄銅製四段積上経筒一本と経巻式残欠である。

経筒 (図版第一五・第22図) 鑄銅製四段積上式経筒である。

蓋を被せた状態での総高四二糎である。台部の下端は六花形に切り出され、二段形の台で、下端最大径一四糎、上端九・四糎である。上段側面には三条、下段には上下に各々三条の沈線がめぐっている。筒身は四段からなり、一・二段は接合部がはずれている。三・四は接合したままである。一段目の下端の径は八・六糎、上端は八・八糎で、上端が若干

大きい。二・三・四段の上下端の径は一段目上端の径と同じである。各段の高さはほぼ同大で約六・四糎である。厚さは一糎で同一である。また各段の側面には上中下に数条の沈線がめぐらされているが、一段目の下端と四段目の上端にはめぐらされていない。

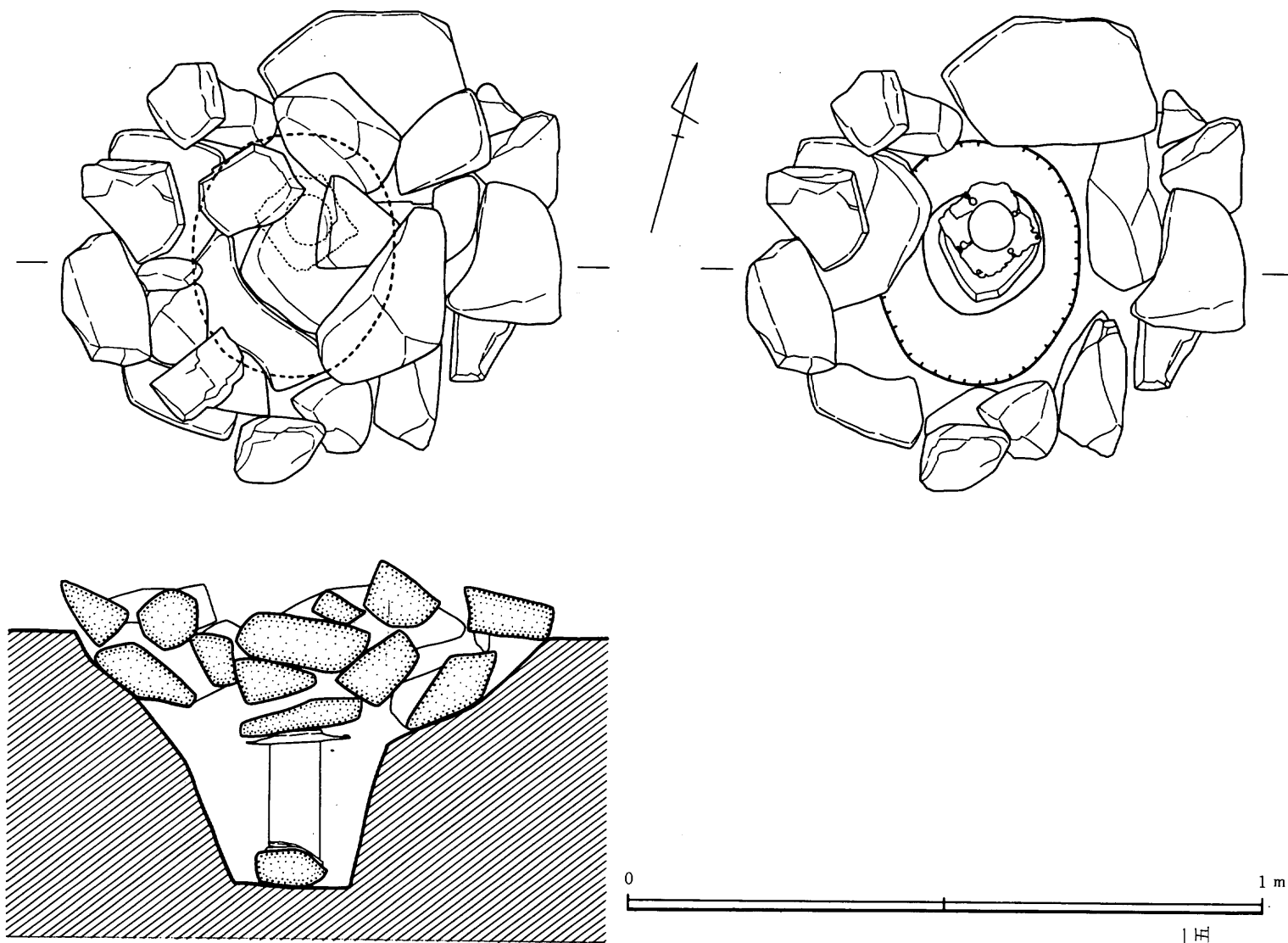
蓋は円形三段傘形蓋に三輪、宝珠をつけた相輪を頂上に立てるもので、両者は現在分離しているが、本来はハンダ様のもので接合されていたようである。蓋の側面四ヶ所に数条の沈線がめぐらされている。蓋の下端径一二・七糎、高さ一三・三糎。

経筒内から炭化した経巻残欠と経軸とが発見された。経巻は炭化していてボロボロになり、経軸に若干付着している状態である。経軸は竹材と考えられ、径一糎、現在長二二糎である。経軸は四本が残っている（図版第一八）。

（渡辺正気・宮小路賀宏）

3、第三号 経塚（図版第四・第一五）

厚さ一七糎の表土をのぞくと、黄褐色の花崗岩ばい乱土が約四〇糎ほどつづいたのちに花崗岩栗石の集積した状態があらわれる。その範囲は径七〇糎ばかりのほぼ円形に積石を配し、その中に栗石が集積されている。中央部がやや凹んでいて全体に陥没している様子がみられた。栗石は二重・三重に重ねてあって、これをとりぞいてゆくと二〇×三〇糎余の大きさをもった花崗岩の板状割石があらわれた。このあたりから次第に炭灰土が多くなってきた、この板状割石が経塚の蓋石であることは疑いない状態となってきた。この蓋石の沈下によって、上部の栗石群が凹みを生



第 8 図 第三号経塚 構造実測図

ずるにいたったものである。

蓋石をのぞくと、銅製経筒の蓋が鮮やかな緑青色をもってあらわれ、周囲は炭灰土で充満していた。経筒は上からの圧力でやや押しつぶされた状態を示しており、花形座に切り出された銅板製の蓋は変形しながら筒身に鏽着していて、両者を分離することはできない。この蓋の縁にはガラス製丸玉を細金で連ねた瓔珞が垂下してあったらしく、ほとんどもが切れ落ちて散乱して炭灰土中から検出されている。経筒の下には平たい底石一枚が据えられていた。

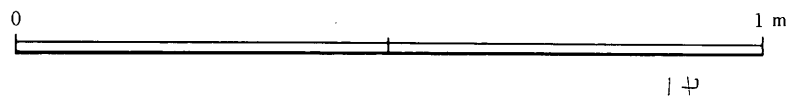
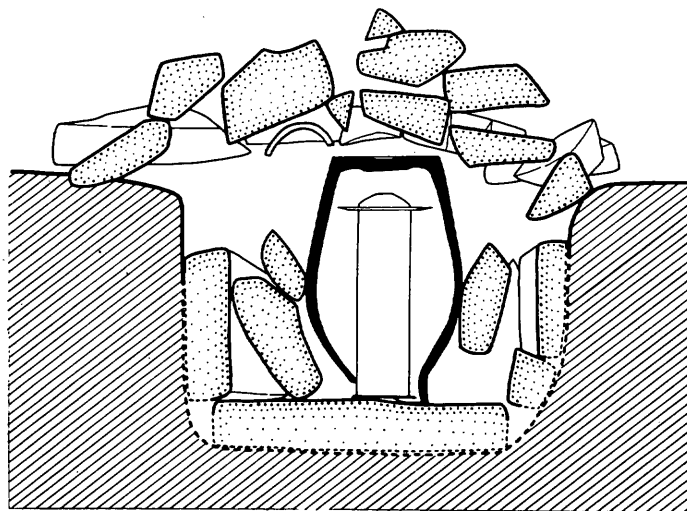
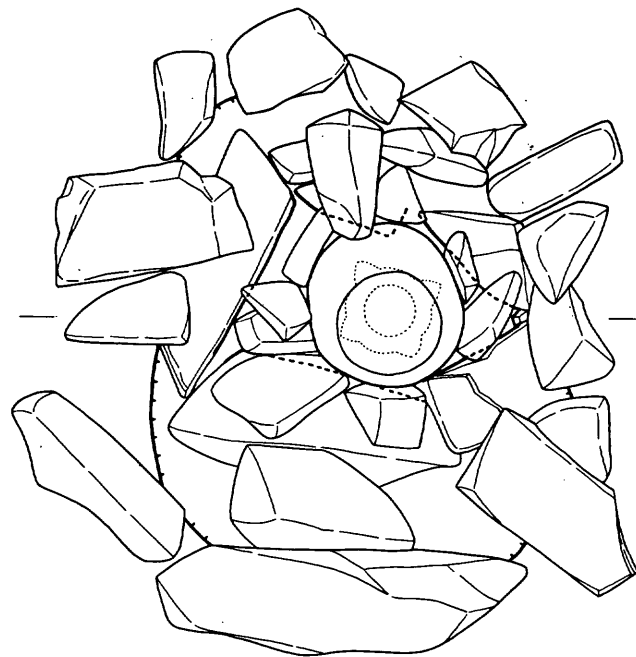
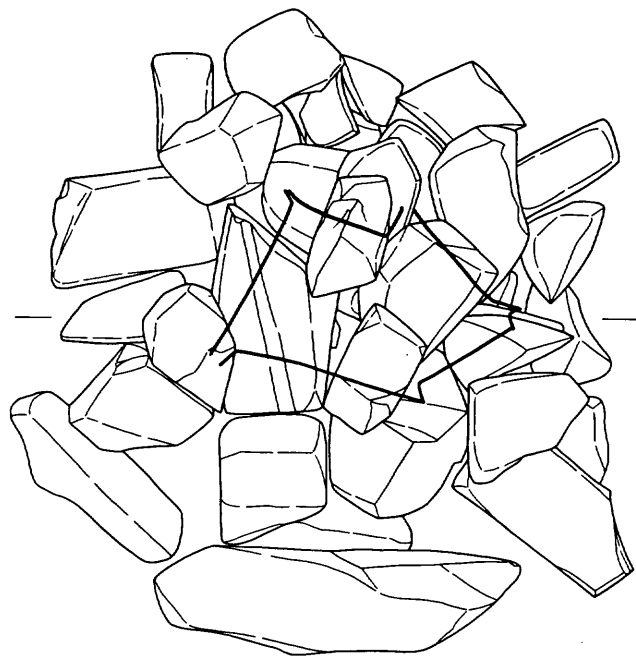
経筒を収納した穴は、地山を素掘りしたものであるが、蓋石の在る深度位から掘方の径をせばめて三〇×三七糎ばかりの隋円形につくり、底では径一八糎ほどになる。したがって蓋石のかかるところは石の大きさと掘方の径がほとんど大小をつけがたく、ために掘方の縁が崩れやすい状態であったことが蓋石沈下の原因を招いたのである。

発掘された経筒は銅板製鋳留円筒式で、同じく銅板製切出花形座の蓋をとまなっている。しかし蓋石の沈下によって蓋と底部がおしつぶされて変形してしまった。複元しえた筒身の大きさは高さ二五糎、径八糎となり、同じく銅板製の円形台座と鋳で固着されている(図版第一五)。

(小田富士雄)

4、第四号経塚(図版第五・第六・第一六・第一八・第一九)

厚さ一四糎の表土をはぎ、さらに厚さ約六六糎の黄色土をはぐと地山(花崗岩バイラン土)が現われ、栗石の集積された状態が明らかとなる。栗石の範囲は八〇×八五糎の円形プランで、中心部が盛上るように積み重ねられている。



第9図 第四号経塚 構造実測図

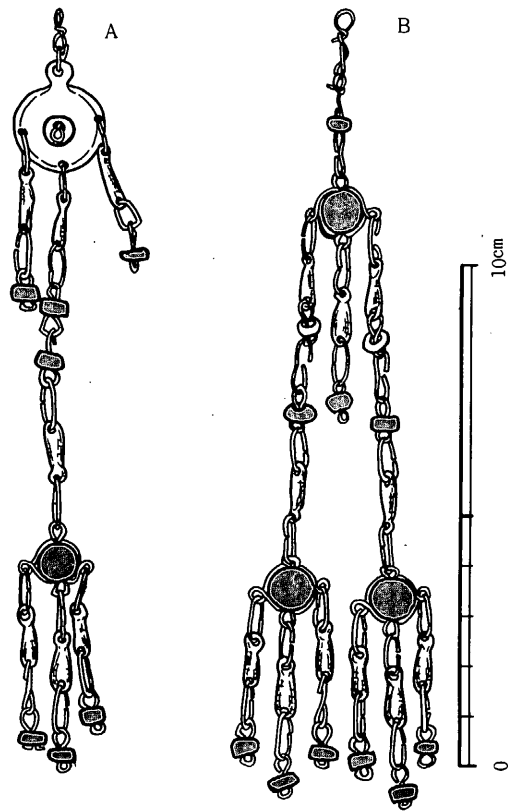
栗石は大きなもので二三×一八糎大、小さなもので八×八糎大のものがある。これらの栗石を取りのぞくと、地山を掘りくぼめた上縁が認められる。この掘り方は五五×六五糎のほぼ円形プランで、深さ約三五糎である。栗石直下には蓋石となるものではなく、須惠系甕を倒立させて経筒の保護にあてている。円形掘り方底面には扁平な板石を敷いて底部となし、側石を立てて石囲いを作っている。蓋石はないが小石室を形作っている。石室と甕との間には若干の空間があり、これに栗石をつめて甕を固定している。

上部に積み重ねられた栗石の中には、甕と同一固体の頭部破片が混入していた。甕が完形であった場合経筒の蓋は頸部につかえて挿入することができなく、したがって埋納時に頸部を打ち割って使用されたことを物語っている。

本経塚で発見された遺物は、外筒に使用された須惠系甕と経筒及び経巻残欠がある。

経筒（図版第六・第22図）銅板製鋲止め経筒である。蓋をした状態で総高二七糎である。筒身は厚さ〇・八糎の銅板を円筒状にまげ、両端を重ねて一〇個の鋲で接合して筒身とし、筒身の一端を外方にまげ広げて底板と七個の鋲で接合している。底板は銅板を径八・七糎の円形に切り出したもので、若干反り上がっている。筒身の上・中・下には巾七耗の金箔が貼りめぐらされている。

蓋は、銅板切出花形座の蓋である。筒身が挿入できるように中心を円形に打出し、その周囲に八葉の蓮弁を配置している。花卉の周縁は反り上り、各弁間を打ち出して界線を作っている。中心部のドーム状に打ち出された頂部は、打ち出しの無理で亀裂が生じたため二個の鋲で補修されている。八葉の花弁の先端には径一耗の孔が穿たれ、それぞれに瓔珞が垂下されている。瓔珞は破損したものや、小さな部分での相異はあるが、ほぼ第一〇図に示した復元図の形式を意図したものと考えられ、この二形式の瓔珞が交互に配されていたものと思われる。仮にA式（第一〇図A）とB式（第一〇図B）とに分けてみる。



第10図 瓔珞復元形式図

下端には環状銅線、ガラス小玉、瓢箪形金具及びガラス丸玉をもって構成される。このガラス丸玉は球面に銅線をめぐらし、上下左右に連絡部を作っていて、下部に位置して上部の円形飾板と同様の役目をはたしている。A式の全長は一五糎である。

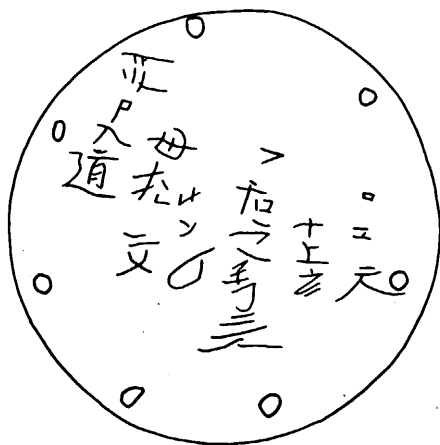
B式は、A式の円形飾板の代りにガラス丸玉が使用され、左右にA式瓔珞円形飾板の下端に垂下されたと同じ形の部品を垂下している。全長一六糎。

二形式に使用された円形飾板及び瓢箪形金具は表面に鍍金が施されている。ガラス玉は全てコバルト色を帯びている。

経筒底部に銘文らしい線が認められたが、極めて細くかつ浅いために解読することができなかった。しかし、一部

A式を構成する金具及び玉類は五種類からなる。まずB式と異なる点は、銅板を円形に切り出した飾板を使用していることである。この円形飾板は上端が突出していて、経筒蓋と〇・七耗の銅線で連縛され、中心にガラス小玉を銅線で接着したもので、左右及び下端にさらに装飾部品が垂下される。A式瓔珞の中心となる部分である。左右には環状銅線、瓢箪形金具及びガラス小玉で構成された長約二・五糎の飾りを垂下し、

の文字が認められたので、左に記し、細線の認められたものについて第11図に示しておく。銘文は六行に二三字針書きされたものである。



第11図 経筒底部の銘文実測図(2/3大)

□
□
□
□

□
上

□
□
□
□
□
□

□
□
□

母□
文

□
□
入道

以上から経塚造営の趣旨等を知ることができないが、経筒のもつ華麗さから、また母なる銘のあるところからも母親の供養のために造営されたのではないかと考えられる。

外筒 (図版第一九・第23図) 経筒を保護するための外容器として須恵系甕が使用されていた。頸部から上端は造営の

際打割られたものと考えられ、上部の栗石の中に破片が混在していた。口縁部をなお欠失しているが朝顔に開く長頸の甕かと考えられる。内面には二・三厘の間隔で凹凸が残っており、粘土紐による巻上式技法により成形されていることが解る。外面は滑かに成形されている。残存高三九・五厘、底径一四厘。

(宮小路賀宏)

5、第五号 経塚（図版第七・第一五・第一八・第一九）

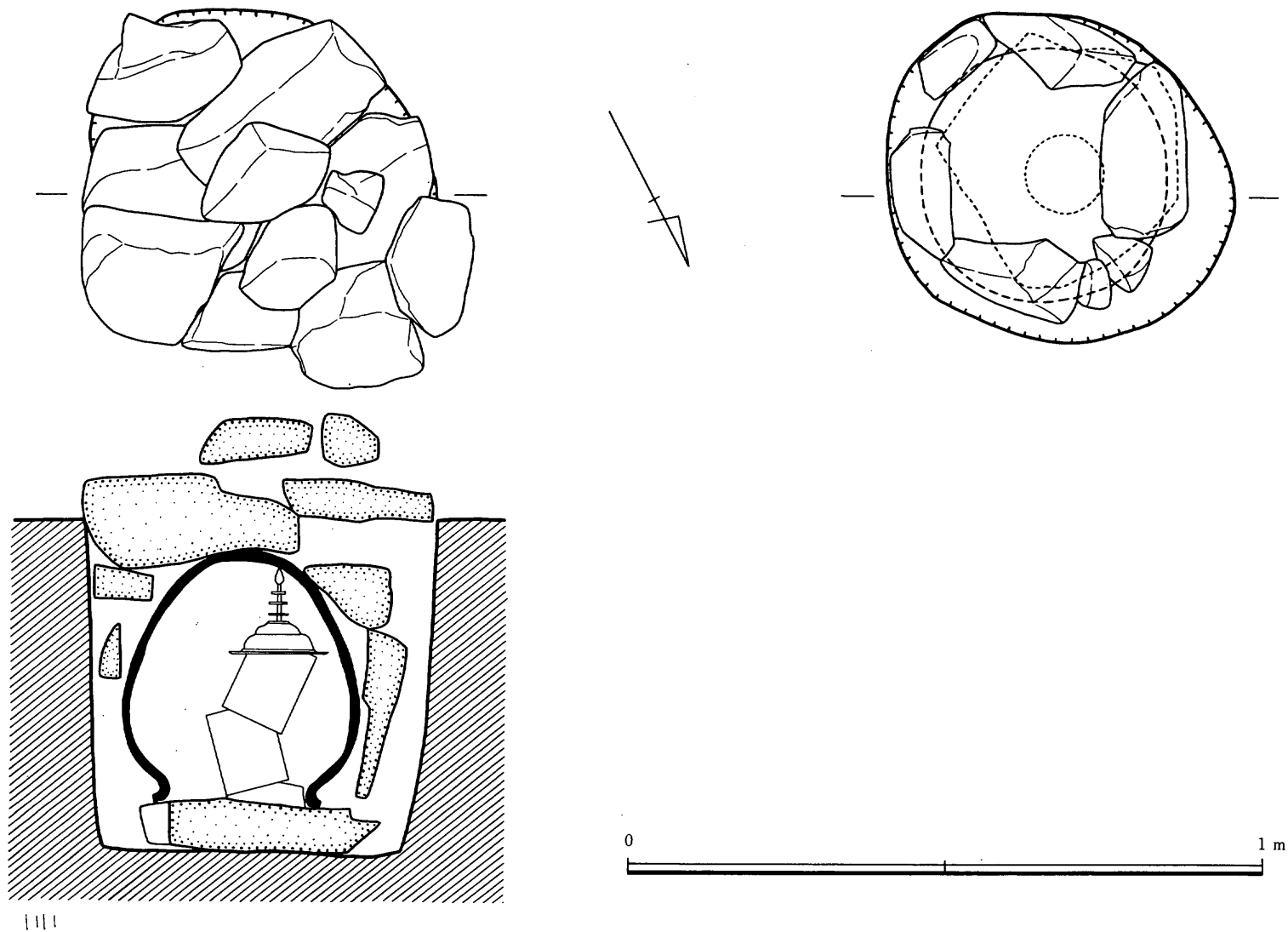
地表下三〇糎ほどで経塚の上をおおう栗石にあたった。花崗岩の割石三枚をあわせて蓋をつくっており、その範囲は五五糎×三五糎の長方形をなしている。やや大きな栗石七個をもって蓋石のつぎ目や外縁の部分を保護するように配置しているが、蓋石の構造は栗石をのぞかなくとも観察することができ、蓋石をのぞくと、地山を円形に掘り凹めた上端があらわれ、蓋石は丁度この掘方にはめこまれたような状態である。掘方の径は五五糎×五〇糎のほぼ円形プランの素掘りである。蓋石直下には軟質の須恵系甕を倒立させて経筒の保護にあてた状態があらわれた。この甕と掘方の間には栗石が埴められていて甕の移動を固定している。このつめ石は掘方の上半部までで下半部には及んでいない。

このようにして掘りすめられた本経塚の構造は、深さ五〇糎の掘方の底に、厚さ一〇糎弱の花崗岩扁平割石を据え、この上に銅製経筒を置き、大鏡を倒立して被せ、そのまわりを掘方の底から一五糎ほどの高さまで炭灰を埋めて湿気防除の配慮をなしている。甕はほぼ水平を保って倒立安置されていたが、甕を静かに上に取りあげたにもかかわらず、中の経筒は底石上に台座をのこすだけで、甕と共にぶらさがってとりあげられてしまった。二段積上式銅製経筒であったから、相輪付蓋と二段重ねの筒身はすでに甕の中ではずれていたのであった。

本経塚の遺物には外筒に使用された須恵器甕と経筒と経巻残欠がある。

経筒（図版第一五・第22図）

銅製二段積上式経筒である。蓋を被せた状態での総高四二糎となり、外筒甕の内高三九糎であるから、埋納時において少くとも蓋は正常に被れない状態であったことが知られる。したがって二段筒身



第12図 第五号経塚 構造実測図

も経巻の腐朽にもなつて重ねの部分はずれたのであろう。台は径一一・一糎、高さ三・五糎の円錐台形で、裾がやや開き径一三・三糎となる。側面上端付近に平行沈線が加えられている。筒身は径一〇・二糎、高さ一三・二糎、厚さ一糎の円筒二個を重ねたもので、全面緑青繡におおわれ、一部に紫色の繡がみられる。各円筒の上下には数条の平行沈線がめぐっている。下の筒身にはきわめて浅い細線の針書きによって二行の銘文が刻まれていて、写真、拓影でも判然としないが、拡大鏡を使用して子細に観察し、実測した結果、次のように判読できた。

大治元年閏十月廿五日

勤進僧 □ □

大治元年は西暦一一二六年で、今回発掘した経塚のうちで唯一の正確な紀年を知りえた点できわめて重要である。

蓋は円形二重傘形に三輪、宝珠をつけた相輪を頂上に立てている。蓋の下端径一五・九糎、高さ一三・六糎。

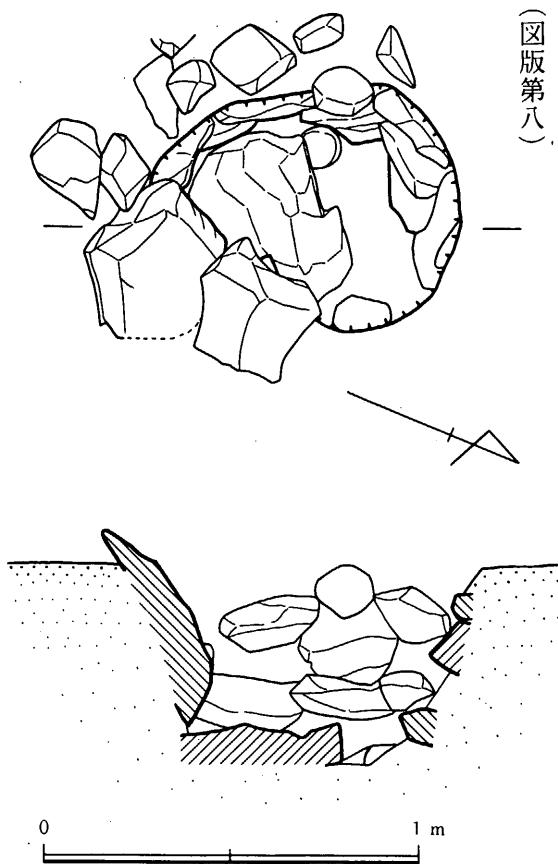
経巻（図版第一八）大部分が灰泥化した紙本経残欠が経筒の台座上にのこっていた。経巻は中心に軸木をおいて巻いたもの十巻から成っていたらしく、その痕跡をたどることができる。現存する経巻のまわりには腐朽と共に沈下した一―二巻分の経巻が全巻軸を外からとりまいたような状態を呈している。おそらく妙法蓮華経八巻と開巻（無量義経）、結巻（観普賢経）各々一巻の構成であつたと思われる。

外筒（図版第一九・第23図）経筒を保護するために倒立して被せていた須恵器大甕である。高さ四〇糎、口径二六糎、胴の最大径は上位にあり、三六・八糎である。灰黄色を呈する焼成やや軟質、丸底で、全面に平行条線叩きがみられる。下半部は叩きを交叉させて打つてある。古代末期の陶器資料として確実な年代を知ることのできる数少い貴重な遺品といえよう。

（小田富士雄）

6、第六号経塚（図版第八）

地表下三十糎余で発見された組石遺構である。すでに盗掘されて蓋石もなく、組石の一部もひき抜かれていたが、本来花崗岩の栗石を平積みしてつくられた円形プラン石室の構造をなすものであったことが確認された。炭灰などの検出もあったので、これが経塚であったことは疑いない。石材の組み方はやや粗雑で、凹凸のかなり目立つ割石が底石に使用されている。石室の大きさは径六〇糎、深さ五〇糎ほどであったと思われる。すでに完全に盗掘されていて一物も検出できなかった。埋土の状況からみてそう古い頃の盗掘とも思われない。



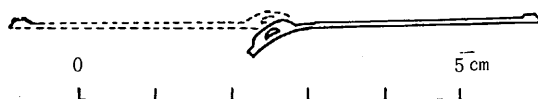
第13図 第六号経塚 石室実測図

（小田富士雄）

7、第七号経塚

E地点の発掘によって、その南端に接して偶然発見されたものである。径五〇糎ばかりの地表から真直に掘り下げられた盗掘穴があり、底面までで約一米に達する。炭灰が多く、径三〇糎ばかりの花崗岩扁平割石があつた。また炭灰にまじつて和鏡片一個が発見された。経塚が盗掘された跡であることは疑いない。おそらく地山を凹形素掘りして、底に台石を据える構造であつたと思われる。

和鏡はほぼ半分をのこす破片で、破れ口が湾曲しており、盗掘時に鍬の如きもので割られてとり残されたものと思われる。複原径六・八糎の円鏡で、紐孔には麻紐のような紐材が今なお鮮やかにのこっている。鏡の厚み一糎、周縁は幅二糎の素縁がわずかに高くつくられている。鏡背には簡略な草花の鑄出があり、平安時代末期の和鏡に屢々みる手法を示している。



第14図 第七経塚発見の和鏡片

(小田富士雄)

8、第八号経塚（図版第一〇・第二一・第二四・第二七・第二〇）

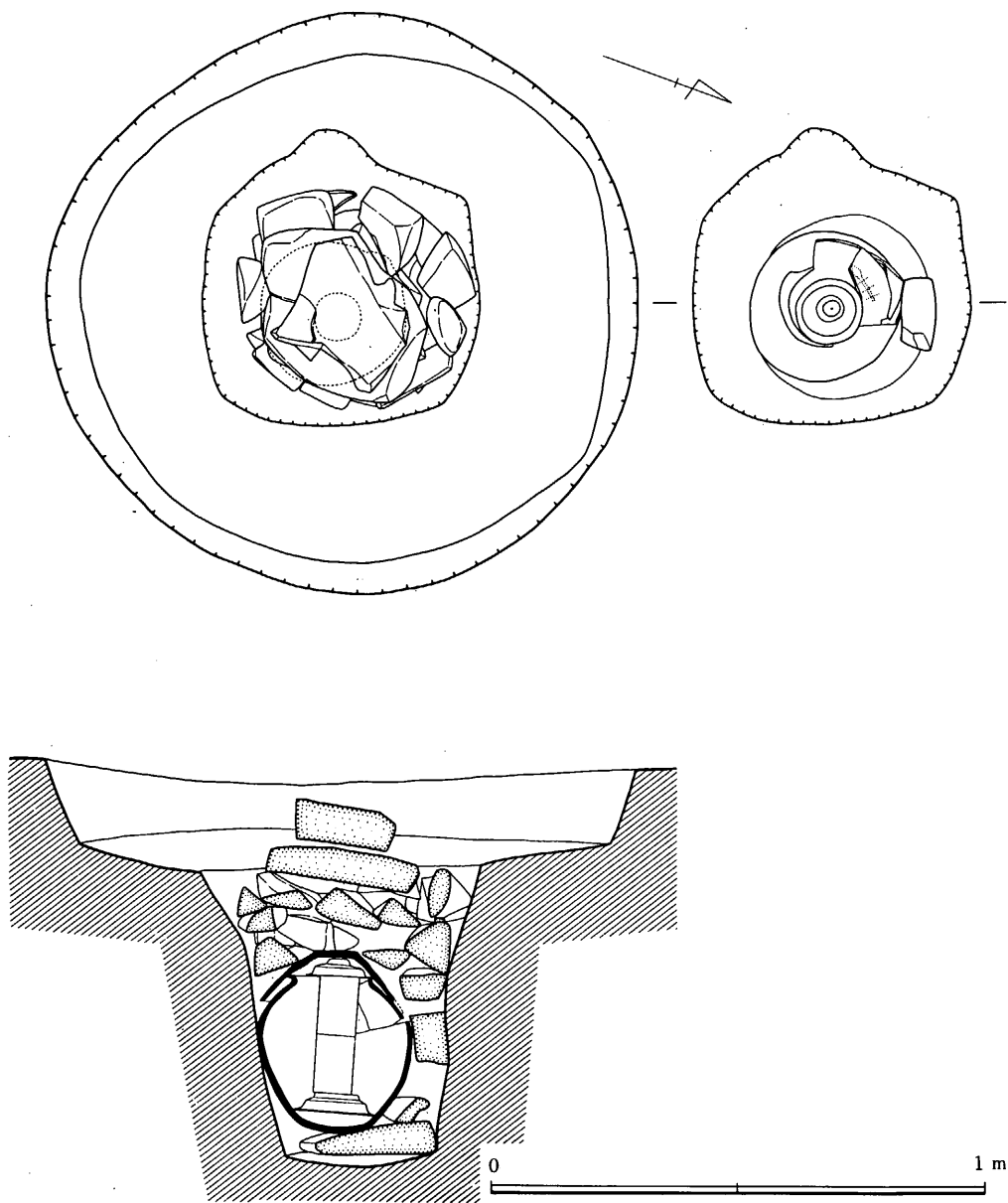
厚さ約四纏の表土と厚さ二〇纏の黄褐色砂質土を取りのぞくと地山が現われ、一二四×一一七纏の円形の掘込みが認められた。この掘込みは約三〇纏の深さで、これを掘り下げると蓋石状の扁平な石が二段に現われ、その周囲にさらに掘込みの周縁が認められた。地山を二段に掘り下げていることがわかる。この部分から炭灰が認められている。上段の扁平な石は三一×二七纏大で、下段のそれは三〇×四二纏大である。扁平な石二枚を取ると栗石が集積された状態があらわれた。栗石は大きなもので一五×一三纏大、小さなもので七×一二纏大のものがある。栗石を取りのぞくと須恵系鉢があらわれた。

二段目の掘り込みは一遍が約五五纏の隅丸方形プランの深さ六〇纏で、底部は径三七纏の円形にすばまる。底部には扁平な板石一枚を敷いて底石とし、須恵甕を立てて前記の鉢を被せ経筒の保護にあてている。掘り込みと甕との間には若干の間隙ができるために栗石をつめて甕を固定している。蓋に使用された鉢を取ると須恵系甕の内に鋳銅製経筒があらわれた。経筒の相輪は、経筒の高さに対し容器の法量が小さいために折りとられ、甕の底に置かれていた。

本経塚から発見された遺物は、経筒及び経軸残欠並びに外容器に使用された須恵系甕と鉢である。

経筒（図版第一七・第二二図） 鋳銅製二段積上式経筒である。前記したように相輪を折りとられているため全体の高さはわからないが、ほぼ総高さは四二纏位いかと考えられる。

台は下端径一五・三纏、上端九・七纏の円形で、二段形になり、それぞれの段に数条の沈線がめぐらされている。筒身は径九・四纏、高さ一二・八纏、厚さ一・五耗の円筒二個を重ねたもので、各筒の上中下に数条の沈線がめぐっている。二個の



第15図 第八号経塚 構造実測図

筒身は現在も接合している。台底面及び筒身側面には銘文は認められない。蓋は円形三段傘形に三輪、宝珠をつけた相輪を頂上に立てたもので、相輪は第五号経塚出土経筒と同手法の挿入式である。蓋の下端径一四・九糎、復元高一三・八糎。経筒内からは経軸のみ五本発見された。経軸は約二耗の方形のもので現存長七糎のものが最も長く、木製である。

外筒（図版第二〇・第23図） 経筒を保護するために使用された須惠器甕と須惠系片口鉢がある。

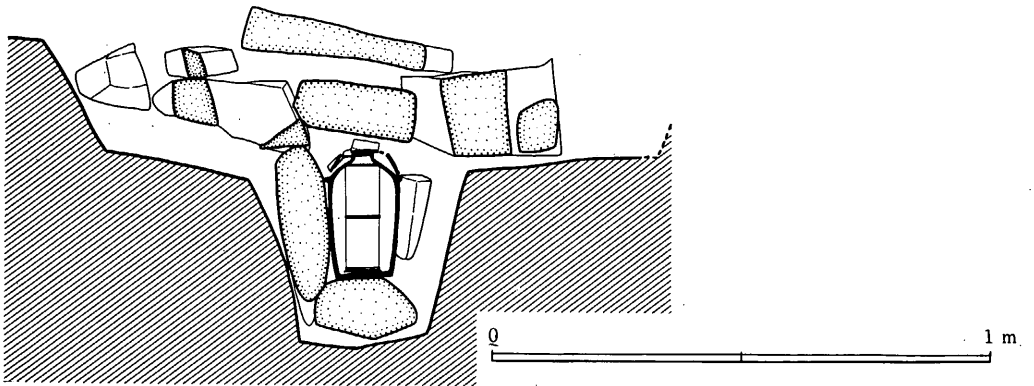
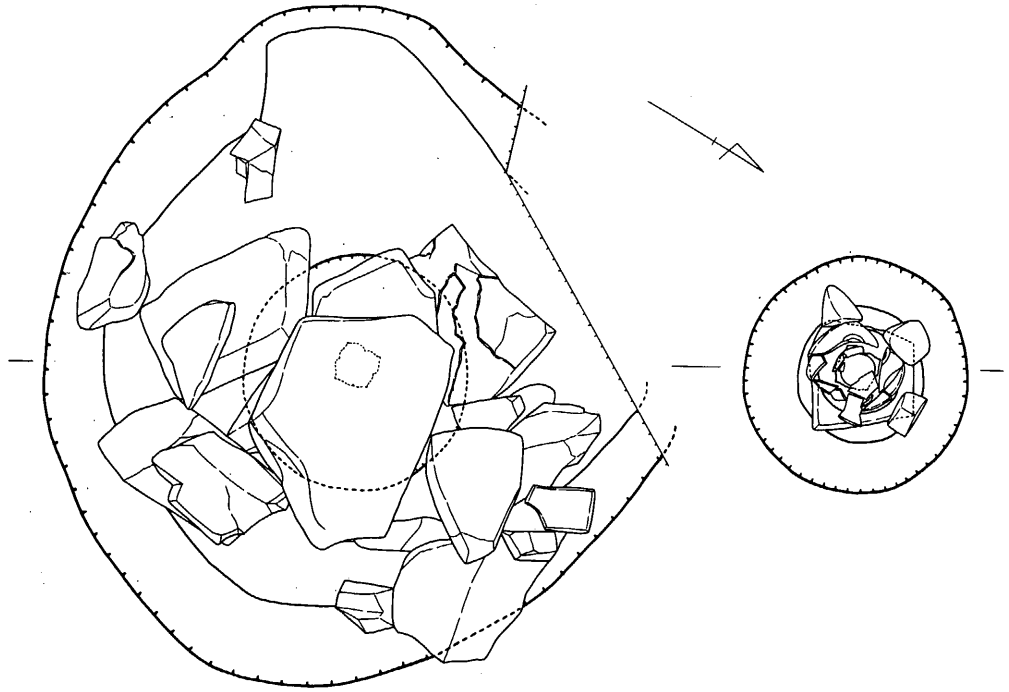
甕は高三一・八糎、口径一八・二糎、胴部最大径三二・二糎である。外面には頸部以下に平行叩きが施されている。

蓋に使用された鉢は須惠系片口鉢である。底径九・八糎、口径二九・四糎、高さ一一・九糎の鼠灰色を呈する軟質のものである。

（宮小路賀宏）

9、第九号経塚（図版第二二・第二三・第一四・第一七・第二二）

第六・八・十号経塚と接して発見された。厚さ約一五糎の表土をはぎ、さらに約三〇糎の黄褐色砂質土をとりのぞくと地山があらわれ、一三八×約一三〇糎のほぼ円形の掘込みが認められた。この掘込みは約二五糎の深さで、埋土をとりのぞくとやや大きな花崗岩の自然石が集積された状態が現われる、その状態は中心に天井石状の扁平な石（四五×四〇糎）があり、それを支えるようにほぼ同大の石四個が配置されている。その間には若干小さい石が詰められている。天井石を取るとさらに下に天井石があらわれ、これを取ると炭灰層があらわれた。天井石及びそれを支える石材



第16図 第九号経塚 構造実測図

を取ると径四五×四七糎の円形の掘込み上縁が現われた。二段に掘り込まれているこの構造は第八経塚と同様である。若干異なることは、第八経塚の石材の集積状態が第二段目の掘込み内にあり、石材の多くが栗石大であるのに対し、第九経塚は、第一段目の掘込み内に石材が多く集積されていて、大きい石材を主に使用されていることである。しかし、構造的には全く同一であると云える。第二段目の掘込み内は炭・灰で填されている。注意深く炭・灰を取りあげていくと白磁碗が発見された。白磁碗は破損していて、経筒蓋と外容器に使用された壺形土器が見られた。また、経筒蓋とほぼ同じ深さの炭・灰中にガラス玉（径約四・七糎のガラス玉）が多数発見された。これは経筒の蓋に瓔珞が垂下されていたことを知り得る。二段目掘込みは二七・五糎の深さで、二五×二七糎の円形にすばまり、底に一辺約二三糎のほぼ方形の扁平な底石が敷かれている。この底石の上に外容器が立てられ、経筒が安置されていた。掘込みと外容器の間には若干の間隙があり、外容器は四個の栗石で固定されている。

経筒

（図版第一七・第22図）

銅板製鋳留経筒である。筒身の底は厚さ一糎の銅板を八花形に切り出したもので、最大

径七・五糎を数える。筒身との接合に鋳五個を使用している。筒部は一糎の銅板を筒状に曲げ、六個の鋳で留め、上中下に銅線をめぐらしている。これは有節経筒を意味するもので、第四号経塚出土経筒と同趣向である。筒身高二三・二糎。蓋は、周縁が四花形に切り出され、筒身に出せられるように円錐状に打ちされている。周縁の各花卉の先端には一糎の孔が穿たれていて、四個所に瓔珞が垂下かかっていたと考えらる。最大径一〇糎、高二・一糎。使用された銅板がしっかりしており、また胴部に節を持つことから全体にしっかりした感じがする。

外筒

（図版第二・第23図）

経筒を保護するための外容器として陶製甕と白磁碗が使用されている。甕は頸部から折

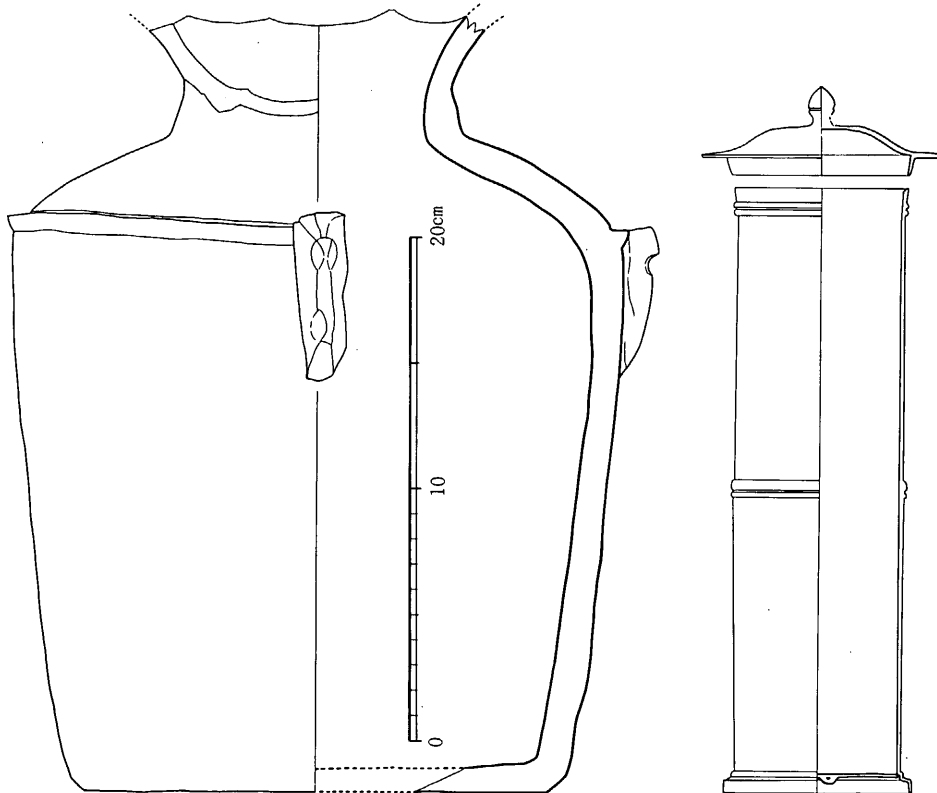
損していて上端を失っている。経塚造営前にあらかじめ割られていたものと考えられる。欠失している部分は頸部のカーブから外上方に広がるようである。肩に一条の凸帯がめぐっている。現存高二四・七糎、底径一一・五糎である。

黒褐色を帯びている。頸部の最小径八・四糎で、経筒々身を挿入してあまり余裕を残さない。経筒蓋は外筒の法量から云って当然外に出てしまう。この種外筒に類似するものに福岡県大牟田市岩本出土のものがある。外筒の蓋に使用された白磁碗は高さ六・六糎、口径十六・八糎、底径七・三糎である。底は切り高台、口縁は断面三角形に外に突出している。胎土は白色の磁土を使用し、灰白色の釉が施されている。

(宮小路賀宏)

10、第十号経塚 (図版第八、第一七)

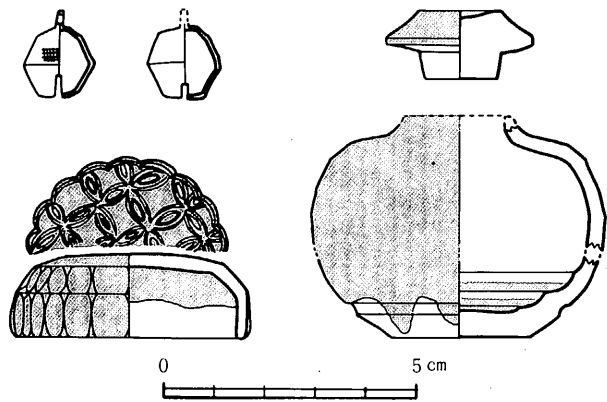
盗掘された経塚で、円形素掘りの穴と、穴の上縁におかれていた栗石の一部がのこっていた。中から外筒と思われる須恵器甕の破片



第17図 福岡県大牟田市岩本出土の経筒と陶製外筒



第18図 第十号経塚発見の陶製外筒



第19図 第十号経塚 伴出遺物実測図

多数と、香合形陶磁器片、銅鈴、ガラス丸玉などが発見された。盗掘の際にとりのこしたものと思われる。

外筒 盗掘の際に破壊して現地に遺棄していたが、集めて接合してみるとほぼ一個体分となった。底部がなくなっている。長胴の大形甕で、灰白色を呈する軟質焼成の須恵器である。格子目叩きが全面にみられる。底部は平底であったと思われる。復原高四六糎、口径二三・五糎、胴部最大径三四・七糎。

銅鈴 二個ある。全体として径一・四糎の球形を呈するが、胴部に稜がつき、下端に平坦面をつくっている。二個とも同形同大で、頂上に銅線を折りまげた吊環を装着している。一個の一部に麻布らしきものの鏽着がみられる。

青白磁合子

径四・八糎、高さ一・六糎の円形皿状の蓋破片である。わが国の経塚から屢々発見される中国江南産の優品である。輪花状の外形を呈し、釉の厚い凹みの部分は青色のさながら影があらわれたような雅味があつて、中国人が影青と称するのも首肯されよう。内面上部にもうすく釉がかかっている。上面には複線から成る七宝連繫文が施されている。いわゆる印籠蓋式の香合である。

埴形合子

埴形をなすと思われる破片二個と栓形の蓋がある。淡緑白釉をかぶせたもので、一見灰釉かと思われる。釉も無雑作にかけられていて、底部付近は胎土が露呈している。埴は復原図が作成できたので、それによってみると、高さ約四・五糎、胴径五・八糎の平底球形となる。蓋は径三糎の上面やや凹んだ栓形をなす。胎土は精選された陶土を使用している。中国産かどうか疑わしい。

ガラス丸玉

風化しているが本来青色をしていたものが二個採集されている。径六・九糎で、経筒に垂下していた瓔珞の付属品であろう。

(小田富士雄)

四、総括

1、経塚の構造と特色

武藏寺経塚は前後二回の発掘調査によって計十ヶ所の経塚が確認された。さして広くない丘上の縁辺に沿って配置されていた。何故に中央部が空所にのこされているのかわからないが、このような配置自体問題がありそうである。

一説には通称「堂山」と云われる如く、ここに堂舎があつて、その周辺に経塚が営造されたからにほかならないとする推察がある。しかし調査前の現状はすでに頂上が削平された状態であり、またそれ以前に礎石や瓦の如きものの存在が知られていたとか、或は堂舎が存在したという伝承があるとかの掘るべき手がかりがない。ただ発掘中に出土した須恵器、土師器の破片が若干あつて、その中には経塚営造以前に比定すべき特徴をもったものがある点は注目される。土師器は経塚を覆う石積み直上から発見されたものについては、埋納時の供養行事に使用されたと解釈されるところが経塚に関係なく発見された須恵器には奈良時代にさかのぼる特徴を備えている。これを有力な証拠として堂舎が存在したことを認めるとしても、遺物の示すところは経塚営造の時期まで存続していたことを証明するにはいたらない。

また一説には丘上の縁辺に営造された経塚の在り方から、排水の便を考慮したものであらうと推察されるむきもある。しかしこれも第一・六・七・八・九・十号経塚のように丘上の中央近くに寄つて営造されたものについては首肯し難いであらう。このように考えてくると、その配置については現在十分な説明は得られないと云わざるをえないのである。

次に経塚が地上に何らかの標識を設けていたかどうかという点は、これも不明である。一般に小盛土を築くとか、植樹するとか、塔婆を据えるとかの方法が考えられるが、これも地表の削平がすすんでいるために手がかりがない。ただ短期間中に次々と経塚が営造されたと考えられるにもかかわらず、きわめて接近して配置している事実から推して、経塚相互の位置はかなり明確に知られていたであらう。したがって恒久的な施設ではなかったにせよ、何らかの地上施設が在ったと考えるのが妥当であらう。

十基にのぼる経塚の内部構造を調査してみると、そこにはいくつかの類型が成立する。

(A)、地山を円筒形に掘りこみ、経筒を納置するもの。

第一号、第三号、第五号、第七号、第八号、第九号、第十号。

(B)、小石室を設け、中に経筒を納置するもの。

第二号、第六号

(C)、地山をやや大きく掘りこみ、経筒を据えて空間を栗石で固めるもの。

第四号。

以上三類型に大別することができるが、(C)は(B)の簡略式と考えられるかも知れない。武藏寺経塚で最も多いものは(A)の場合であつて、これが本経塚を特徴づける基本型とすることができよう。これは地山を径四〇〜五〇浬、深さ四〇〜六〇浬ばかりの円筒形に掘りこみ、底に台石を据えて経筒を安置する。外筒を伴う場合もあるが、周囲には木炭、灰を填める。次に掘り穴の縁には栗石をならべ、平たい蓋石を被せて、さらに栗石を積み重ねて保護する。外筒を使用する場合は周囲を栗石でかため、最後に蓋石をのせるといふ逆の順序がとられている。このような营造方法は武藏寺経塚における基本方式であつた。これまで近傍の四王寺山や西油山などの著名な経塚では多く(B)の方法、乃ち石室を設けて経筒を納置する場合であつた。したがって石室構造の簡略化と考えられないでもないが今のところ十分な説明はできない。

次に経筒の納置方法についてみておこう。これを整理すれば別表のようになる。盗掘されたものを含めて先ず六基は外筒を使用して経筒を保護したことは確実である。これには二種の方法が行われた。

(A)、経筒を安置して須惠器外容器を倒立して被せるもの。

第四号、第五号、第十号(？)

経塚No.	経筒	伴出品	外容器	備考
第2号	銅板四段積上式 相輪付蓋	経軸4本	—	調査前発掘
第3号	銅板円筒式 四葉形蓋環珞付	—	—	
第4号	銅板円筒式(金箔帯巻) 八葉形蓋環珞付	経巻10軸分残次	須恵器花瓶形 (倒立被せ)	針書銘六行
第5号	銅板二段積上式 相輪付蓋		須恵器甕 (倒立被せ)	針書銘「大治元年…」 (1126)
第6号	?	?	?	盗掘
第7号	?	和鏡片1	?	盗掘
第8号	銅板二段積上式 相輪付蓋	経軸5本	瓦器片口付鉢(蓋) 須恵器甕	
第9号	銅板円筒式 四葉形蓋環珞付	—	白磁碗(蓋) 陶器花瓶形	
第10号	?	青白磁香合2(+) 銅鈴2	須恵器甕	盗掘

(B)、須恵器外容器を正常に安置し、内に経筒を納めてさらに容器を蓋として被せるもの。

第八号、第九号。

本来、外容器を用いるということは、経筒が直接土砂や木炭にまみれて汚れ、損傷するのを防いで後世に伝えようとする丁寧な方法として採用されたものであるが、武藏寺経塚ではそのために特別な専用品として注文製作されたものではない。日常の生活や仏事に使用していたものを転用したと考えられるのである。(A)の場合に、第五号経塚では倒立した甕の口縁は一部欠けており、第四号経塚では花瓶形の細長い頸を埋納時に現地で打ち欠き、それでも経筒の蓋が大きくて被せられないために、もう一度胴部を割って破片を接合して被せる方法をとっていた。さらに(B)の場合には、第八号経塚で、経筒の蓋が大きいために外容器甕の胴部を割って収納したのちに破片を接合している。第九号経塚でも外容器の壺の口が経筒の底部径より小さいために、胴部を割って破片を接合して本来の外形を保っていた。このようにみえると、外筒は経塚営造に際して任意に手頃な容器を選んで使用したにすぎないと云わざるをえない。このことは一方では経筒自体をも傷つけるような措置をとっている場合が

あることから裏付けされる。第八号経塚では納置された経筒の蓋に相輪が付いていて、このままでは外容器の蓋ができないために相輪を付け根から折って経筒の傍に添えた。また第九号経塚では外容器の径よりも蓋が大きく、高さも経筒のそれとほぼ同じであったから、外筒の欠き口に経筒蓋が丁度被るようになり、蓋の縁に垂下した瓔珞は外部に出てしまう。それで瓔珞をはずして分解してしまった玉類を掘り穴を填めた木炭灰中に散布していた。これらの埋置方法は、経筒をも丁重にあつかわなかったことを意味していて、外筒に納めるということの意味を疑わざるをえない。ただ形式的に外筒を使用する風を踏襲したものであろうか。結局、地中埋経という行事に意義があつて、そのほかはさして重視されていないということにもなろう。ただし、このような事例は二例にすぎないので、武藏寺経塚の営造が続けられた一定期間のうちでも、或る一時期に限られた現象である。

以上のように、武藏寺経塚の発掘調査によって得られた成果は少なくないが、また将来に解明をのこした点もある。これらは各地の事例を比較検討し、さらに今後の発見ともあわせて解決をはかりたい。

(小田富士雄)

2、経筒について

武藏寺経塚から発掘されて現存する経筒は六例である。これは銅板製と鑄銅製積上式の二種に限られるという結果が得られた。そこでこれらについて気付いた点をまとめておこう。

銅板製経筒

銅板製経筒は鑄銅製経筒にかわつて流行しはじめ、中、近世には主流をなしたと云われている⁽¹⁾。武藏寺経塚では第三号、第四号、第九号の三経塚から三例の発見があつた。いずれも銅板をまるめて鋳留めする通有の筒

身であつた。蓋は四葉形（第三号、第九号）或は八葉形（第四号）をかたどつた打出し式のもので、いずれも銅線鎖で接続したガラス玉や金銅垂飾を垂らした瓔珞飾りを伴っていた。なかでも注目されたのは第四号では筒身の上、中、下三段に金箔帯を巻き、八葉形蓋の内側縁辺にも金箔帯がめぐらされていたことであり、第九号では筒身の上、中、下三段に細い銅板帯をめぐらして鉄留めしていたことであつた。これまでに触目した銅板製経筒にはほとんど見られなかつた手法のものである。そこで九州地方発見の銅板製経筒の出土例を列举してみると次のようになる。

〔筑前〕

福岡県筑紫郡太宰府町 経塚⁽²⁾

六葉形蓋、外筒（襖）あり

〃 筑紫郡太宰府町片野 般若寺址経塚⁽³⁾

八葉形蓋、保安三年（一一二二）銘針書

〃 粕屋郡宇美町四王寺山 A三経塚⁽⁴⁾

方形蓋

〃 糸島郡前原町高祖字如意 経塚⁽⁵⁾

方形蓋

〔肥前〕

佐賀県鹿島市能古見町山浦 岩屋山経塚⁽⁶⁾

四葉形蓋、滑石外筒あり

〃 鹿島市高津原 片山第一号経塚⁽⁸⁾

十九葉形蓋、陶製四耳壺、滑石鍋蓋の外筒あり

〃 東松浦郡相知町大野 大野経塚⁽⁷⁾

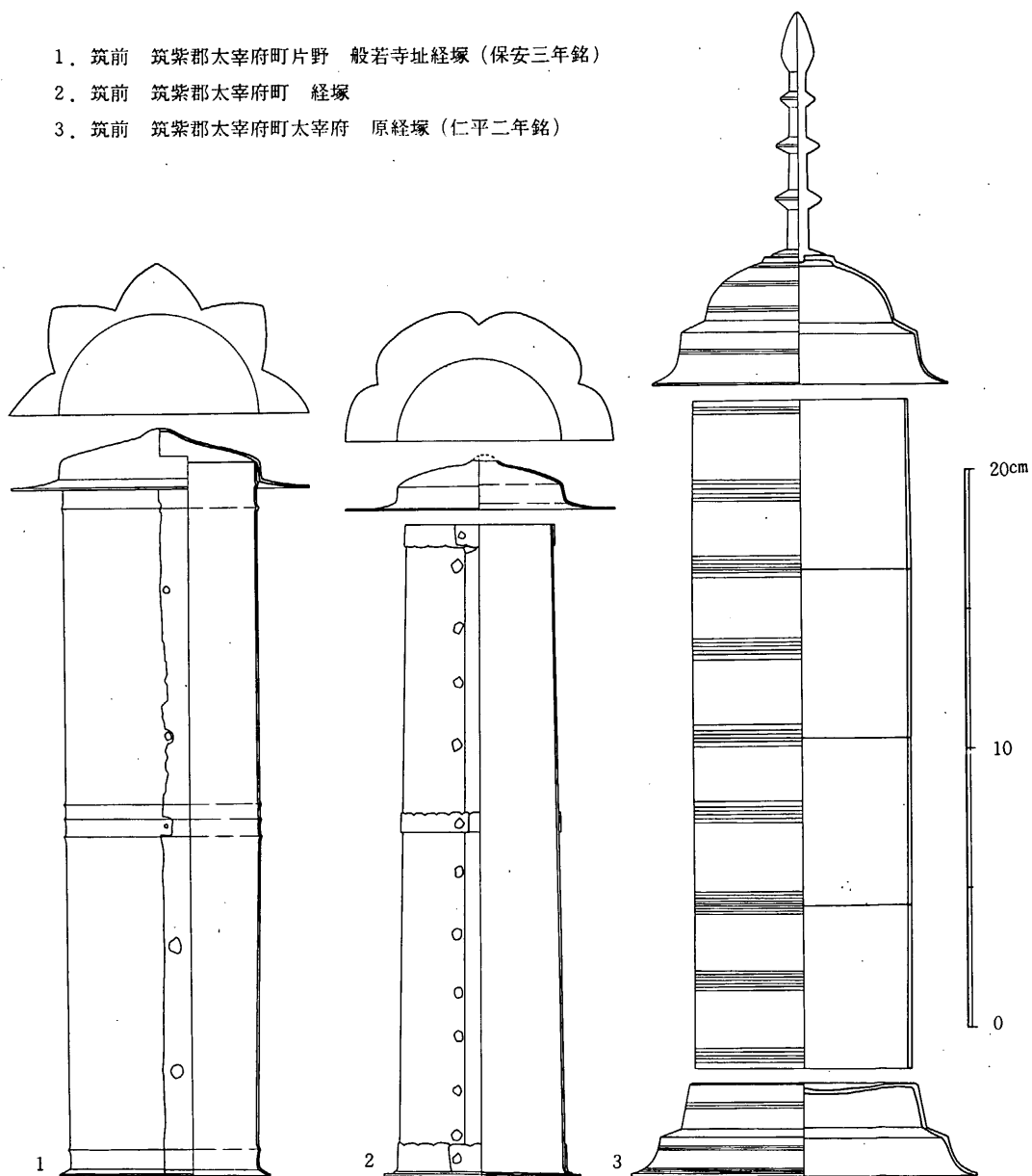
四葉形蓋、滑石外筒あり、天永四年（一一一三）銘紙本経

〃 唐津市鬼塚千々賀 千々賀経塚⁽⁶⁾⁽⁸⁾

四葉形蓋、滑石製石櫃あり

筑前、肥前にわたって計八例が知られているが、武藏寺経塚で新たに三例を加え、十一例となつた。しかしながらその分布はきわめて限られている。そのうち正確な年代の知られるものに天永四年の肥前・大野経塚と保安三年の筑

1. 筑前 筑紫郡太宰府町片野 般若寺址経塚（保安三年銘）
2. 筑前 筑紫郡太宰府町 経塚
3. 筑前 筑紫郡太宰府町太宰府 原経塚（仁平二年銘）



第20図 九州発見の銅板製及び鋳銅製積上式経筒参考例実測図

前・般若寺址経塚の二例がある。蓋は基本的に四葉形をかたどるものと思われるが、筑前の二例は銅板を方形のまま使用して簡略形式かと思われる。

ところで、筑前・太宰府町経塚の例（第20図2）は筒身の上、中、下三段に銅板帯をめぐらして鋸留めしてあって、武藏寺第九号経塚例との類似が指摘される。また、保安三年銘の筑前・般若寺址経塚例（第20図1）は筒身の上、中、下三段に節状の打出しがめぐらされていてやはり同種の類例としてあげられるであろう。

古式の経筒で普遍的にみられるものは鑄銅製の有節円筒式と称されるものである。のち筒身の中位に、或は上、中、下三段に節をめぐらすものである。銅板製経筒が鑄銅製品の簡略化したものとしてあらわれたと考えるならば、金箔を巻き、或は銅板帯巻き、さらには節状打出しなどの手法も、鑄銅製品における節鑄出の形式を踏襲する意図のもとに発生したと考えることができる。

武藏寺経塚における三例の銅板製経筒はいずれも瓔珞を垂下する華やかなものであり、経筒自身も他の鑄銅製品が豪荘な感覚をもっているのに対比して女性的な小振りの製作である。第四号経塚例の筒身底面に記された針書銘によると亡き母の供養のために経塚の营造を發願した意趣が知られて、両者の対比を解釈する一助ともなるのではなからうか。

銅板製経筒の年代については、先にもみた如く九州発見の十一例について二例の平安時代の紀年銘あるものが知られた。他の例についても共伴資料その他から平安時代に比定できる公算はきわめて大きい。特に武藏寺第四号経塚例は、八葉形蓋である点で保安三年（一二三三）筑前・般若寺址経塚のそれに近く、また隣接する第五号経塚例には大治元年（一二二六）銘があつて年代的にも相近い。もつて第五号経塚を前後する接近した年代に比定することができよう。

鑄銅製積上式経筒

この形式の経筒はこれまで北九州に限られた分布が知られていて、九州独自の所産と云われて

いる。⁽¹⁾ しかもこの出土例はさきの銅板製にくらべて出土例も多く、近年では南九州や東九州にまで発見例が知られるようになった。この形式の経筒については先に筆者もまとめたことがあるが、その後約十年を経ているので改めて現在までの出土例をまとめておこう。

〔筑前〕

福岡県筑紫郡太宰府町太宰府

原経塚⁽²⁾⁽⁹⁾

四段積、仁平二(一一五二)・十一 銘墨書

四段積、仁平二・十一・十 銘墨書

四段積

〃 筑紫郡太宰府町

経塚⁽²⁾

二段積

〃 粕屋郡須恵町佐谷

観音谷経塚A⁽²⁾⁽⁹⁾

二段積、天治二(一一二五)・六・初乙 銘針書、外筒(甕)あり

〃 B

三段積、外筒(甕)あり

〃 粕屋郡宇美町四王寺⁽⁴⁾⁽⁹⁾

A 二経塚

四段積、平瓦で保護

D 二経塚

四段積、陶製経筒共伴

〃 粕屋郡宇美町四王寺字村上⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

経塚

四段積、銅製と陶製経筒共伴

銅製に元永元(一一二〇)・十・廿七 銘針書

〃 福岡市西油山字原

原経塚⁽²⁾

四段積

〃 福岡市西油山⁽¹¹⁾

二段積

二段積

四段積

〃 糸島郡怡土村大門⁽¹²⁾

筒身不明、蓋と台座のみ現存

〃 糸島郡前原町雷山附近（伝）

四段積（福岡県教委保管品）

〔筑後〕

福岡県浮羽郡田主丸町森部天満宮

経塚⁽⁹⁾₍₁₃₎

四段積二個、同一外筒（甕）に共存

〃 浮羽郡田主丸町石垣

観音堂経塚⁽⁹⁾₍₁₃₎

二段積

〃 八女郡広川町水原字堂ノ平

第一号経塚⁽⁹⁾

四段積

〔肥前〕

佐賀県唐津市鏡鏡神社境内

甲経塚⁽⁶⁾₍₉₎

四段積、外筒（甕）をかぶせる

〔肥後〕

熊本県荒尾市府本賀庭寺

経塚⁽¹⁴⁾

三段積、筒身のみ現存

〃 菊池郡泗水町飛熊

経塚⁽¹⁵⁾

四段積

〔豊後〕

大分県大野郡緒方町上自在

三宮神社経塚⁽¹⁴⁾

三段積？

〔日向〕

宮崎県延岡市三須⁽⁹⁾₍₁₆₎

経塚

四段積

〃 宮崎市郡司分

四段積

〃 都城市安久字高野原

第二号経塚⁽¹⁷⁾

四段積

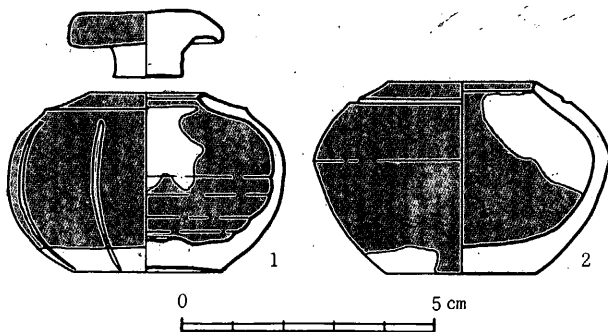
筑前、筑後、肥前、肥後、豊後、日向にわたって二十七例の積上式経筒を数えることができるが、さらに武藏寺経

塚で第二号、第五号、第八号三例の発見を加えて三十例の積上式経筒が知られるに至った。このうち紀年銘あるものでは天治二年（一二二五）の筑前・粕屋郡観音谷経塚、大治元年（一二二六）の筑前・筑紫郡武藏寺第五号経塚、仁平二年（一二五二）の筑前・筑紫郡原経塚（第20図3）が知られていて、十二世紀前半代に集約される感がある。さらに筑前・粕屋郡村上経塚で共伴した鑄銅製経筒には元永元年（一二二〇）の紀年銘があつて、積上式経筒の上限を示している。積上式経筒の形態が現出したことについては旧稿にも推考したように、この種経筒が二段、三段、四段の別はあるとしても、いずれも相輪撮みある傘蓋を有する点では共通していて、法華経中の「見宝塔品」に云う「從地湧出」を期して塔形をかたどつたものであらうという論旨には変りない。したがつて経塚营造の風が起つた当初の意義を失わない頃に限られた流行を示す所産であつたといえるのである。

副納品について 武藏寺経塚で注意をひいたものに経筒に副納した伴出品がある。第七号経塚における和鏡片、第十号経塚における二種の青白磁香合と銅鈴である。我が国経塚の副納品中、和鏡、香合は特に珍らしいというほどではないが、ここでは特に詮状蓋を伴つた埴形香合についてふれておこう。これまで、経塚の副納品として中国産陶磁器香合が発見された例は珍らしくない。しかし埴形香合については類例が乏しい。九州の経塚発見例として筆者は次の二例をあげることができる。

福岡県宗像郡宗像町山田一八〇一の一 山田経塚⁽⁷⁾
福岡県糸島郡前原町高祖字如意 経塚⁽⁵⁾

前者は滑石製外筒に有節円筒式鑄銅経筒が収められていて、経筒に大治五年



第21図 九州発見の埴形香合参考例実測図
(1・山田経塚、2・如意経塚)

(一一三〇)の紀年銘がある。後者は前述せる銅板製経筒に伴出した。いずれも相似た大きさと形態を示す青白磁塔で、前者には詮状の蓋をともなっている。これらの生産地については今にわかには決め難いが、日本製とする積極的証拠はないであろう。ここでは筑前・山田経塚では明確な紀年が知られる点で、武藏寺第十号経塚の年代比定に有力な拠りどころを与えるであろうことを指摘しておきたい。

これらのことはさらに、紀年銘ある武藏寺第五号経塚の場合ともあわせて、外筒に使用された須惠器、瓦器、白磁などの年代を知る手掛りともなろう。古代末期の陶磁器編年については扱ふべき確実な資料が不十分な今日、思わぬ副産物としてこの方面の研究にも有力な資料を提供するものと云わねばなるまい。

以上のようにみてくると、今回調査した武藏寺経塚はほぼ十二世紀前半代という限られた時期に相繼いで营造されたものであろうという推論を導くのである。

(小田富士雄)

註 (1) 石田茂作「経塚」(雄山閣・考古学講座)昭和四年

(2) 藏田藏「経塚論—九州地方出土の経塚遺物」上・下(MUSEUM 181・183号)昭和四十一年

「東京国立博物館図版目録—経塚遺物篇」昭和四十二年

(3) 竹内理三「平安遺文—金石文編」四五一頁、補遺九 昭和三十五年

遺品は奈良市・故玉林善太郎氏藏品、小田実測調査

(4) 島田寅次郎「四王寺の来歴と遺物の発見」(史蹟名勝天然記念物第二集第十一号)昭和二年

(5) 一九六七出土。県立糸島高等学校博物館藏。小田実測調査

- (6) 松尾禎作・木下之治・松岡史「佐賀県下出土の経塚概観」(佐賀県文化財調査報告書第六輯)昭和三十二年
- (7) 小田富士雄「西日本の石製経筒」(日本歴史考古学論叢2)昭和四十三年
- (8) 木下之治「佐賀県における埋蔵文化財の発掘発見の覚書」(郷土研究一〇号)昭和三十五年
- (9) 「佐賀県の遺跡」(佐賀県文化財調査報告書第十三集)昭和三十九年
- (9) 小田富士雄「筑後堂ノ平経塚と出土瓦」(史跡と美術三〇九号)昭和三十五年
- (10) 川上市太郎「昭和七年発見四王寺経筒写経と四王瓦」(福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第八輯)昭和八年
- (11) 竹岡勝也「西油山天福寺址」(福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第九輯)昭和九年 及び小田実查資料による。
- (12) 福岡県立糸島高等学校博物館資料。小田実查。
- (13) 矢野一貞「筑後将士軍談」昭和二年
- (14) 小田実查資料による。
- (15) 「熊本県文化財調査報告第五集(菊池地方)」昭和三十九年
- (16) 鳥居龍藏「上代の日向延岡」昭和十年
- (17) 故前田厚氏稿本「宮崎県北諸県郡中郷村出土古鏡と経筒の研究」

〔補記〕旧稿註(9)文献では横上式経筒についてまとめた際、地名その他について不十分なところがあったが、本稿を草するにあたってはその点を改めたので、旧稿と相違するところは本稿に拠っていただきたい。

なお、稿成ってから銅板製経筒一例もれているのに気付いたので追加しておく。

出土地 福岡県(筑後)久留米市高良山内・稲荷山 四葉形蓋 高良大社蔵

高良社編「宝物貴重品解説」によれば、明治三十一年野中完一氏調査の際発見と伝え、「経塚ハ高良山中往々ニ存セリ本品モ亦ソノ一二属ス」とある。

跋

本書は、経塚、経筒について、九州ではじめての学術報告書で、武蔵寺経塚についてはもちろん、最後には、九州の経筒についてもまとめられていて、経塚研究の貴重な資料の一つであります。すなわち、経塚・経筒の形状・外観・埋蔵状況について、学術的に刻明に調査、分析した資料に基づいて、平安時代の精神文化、佛教思想等を知ろうとする重要な報告書であります。

そもそも本書は、武蔵寺史研究の過程のなかで、完成されたものであります。すなわち、経筒の盗掘事件を契機として、経塚が、にわかには世間の注目を浴びてから、昭和四十年八月六日、史蹟経塚を擁するこの「武蔵寺」を護つていこうという人々の願いが結集されて、武蔵寺の会（武蔵寺を守る会）が発足し、さらに、昭和四十三年三月十六日、経筒一個が偶然発見されたことから「武蔵寺史編さん会」が誕生いたしました。

この会の趣旨は、ご本尊薬師如来さまを中心に、堂塔配置の跡・池庭様式・境内からでた古代瓦・石塔残欠、さらに経塚・経筒・縁起絵巻等の宗教的（信仰）意味と、それがつくられた背景を探究し、解明していくことにありました。寺史編さんは、学問の上からも、非常にたいせつであります。このことがとりもおさず、ご本尊薬師如来さまのみ心にむくいることでもあり、わたくしたちも、無量の功德を得るものと信じています。そこで、この武蔵寺史研究の一分野として、経塚の調査研究を行なったわけであります。

この会の寺史編さんについては、長沼賢海九大名誉教授を長として、鏡山猛九大教授・谷口鉄雄九大教授・太田静六九大教授・筑紫豊県文化財専門委員・渡辺正気県教委文化課技術課長補佐の方々にご依頼しました。また、経塚調査に

は、小田富士男氏（九大考古学教室）宮小路賀宏氏（県教委文化課技師）ほか数人の方々があたられました。本書は、昭和四十三年の三月、四月、九月の前後三回にわたって調査した内容がまとめられたもので、題字と序文は、本年三月に米寿をおむかえになる長沼先生からいただきました。

一方では、武蔵寺護持会の方々が、第一次境内整備復興の発願に随喜され、経塚調査と並行しながら尽力されました。その世話人は、山田彦太郎氏、中川漸氏、清原俊之助氏、大隈正記氏、武石太兵衛氏、大賀礼太郎氏、杉富美子氏、磯部澄子氏等の方々に、後に梶原善次郎氏、林英夫氏も参画していただきました。また、太宰府天満宮西高辻信貞宮司、も広く太宰府文化の一環として、武蔵寺の復興に大いに力をおよせいただいている次第であります。

本書は、このように多くの人々からの、物心両面からのご援助と、み佛のご加護によって、苦しさをのりこえながら完成したものでありまして、ただ感謝、合掌のみであります。ここに、ご喜捨いただいた多くの佛縁の方々に、お礼申し上げます。

次に、経塚発掘を機会に、私は妻とともに、九州ではじめての経塚供養と写経会を発願し、これを武蔵寺の宗教行事（佛事）として、永遠に続けていくことを、ともに誓ったのであります。

昭和四十三年十一月十五日から第一回の写経会を行ない、二十三日には経塚供養を厳修いたしました。この間多くの方々のご参拝を得、佛縁、法縁にふれ、自らも感動し、みなさまとともに、佛子としての法悦にひたつたものであります。しかし、諸行無常の理にありますように、妻は本書ができあがる喜びを待たず他界しました。私は妻の遺志を体して、昭和四十四年十一月十五日から二十三日の間、第二回目を厳肅に勤めました。特にこの回は、石村善石氏の敬けんな祈りと、ご支援をたまわったことを申し添えます。

また、経塚供養には、毎年小石原高取の高取八仙氏から、丹精こめた経筒をご奉納いただいています。その中に写

経したものを最も新しい方法（タイムカプセル）で収め、永遠に埋納することにして供養に励んでおります。

以上述べてまいりました経塚・経筒の意味する宗教的なもの、歴史的なもの、学術的なものから、発掘した経塚、経筒の保存、保管に思いをよせ、その責の重大さに覚悟を新たにいたしております。

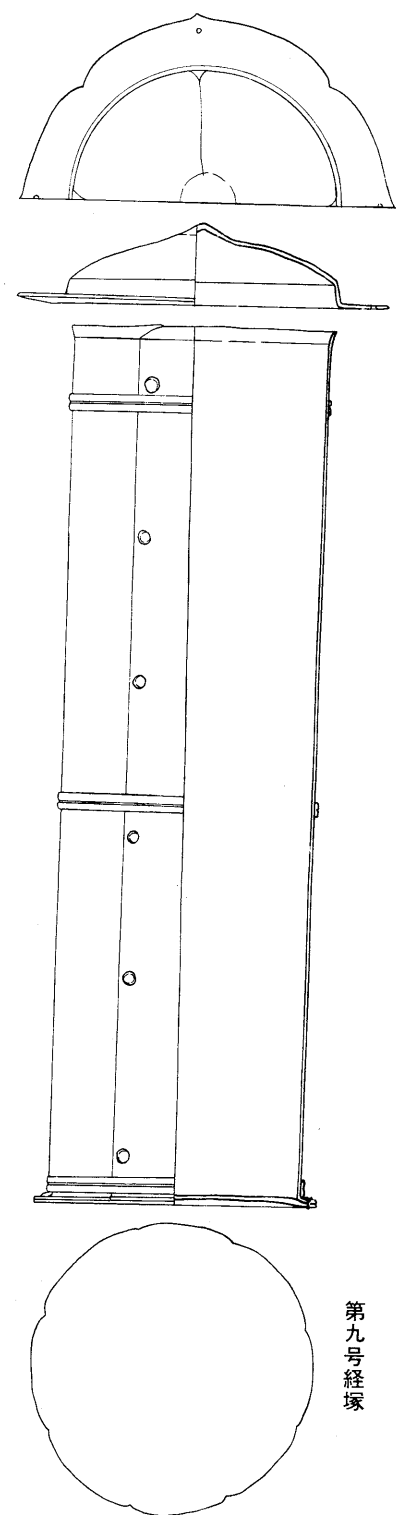
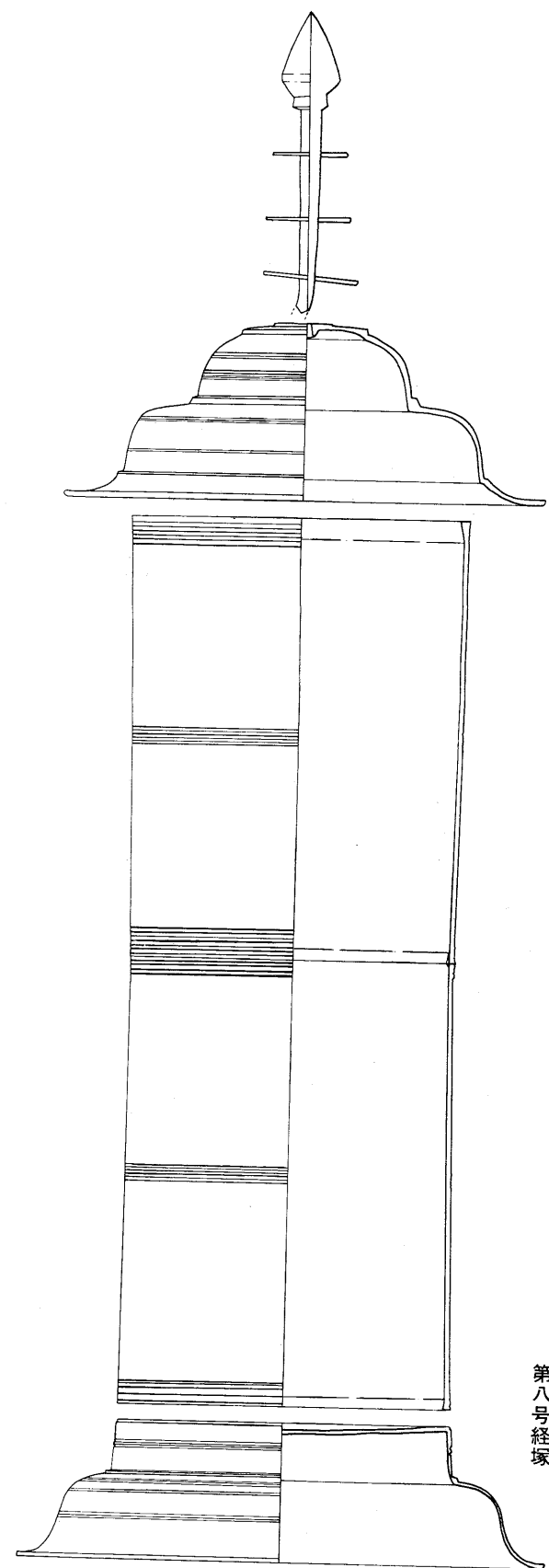
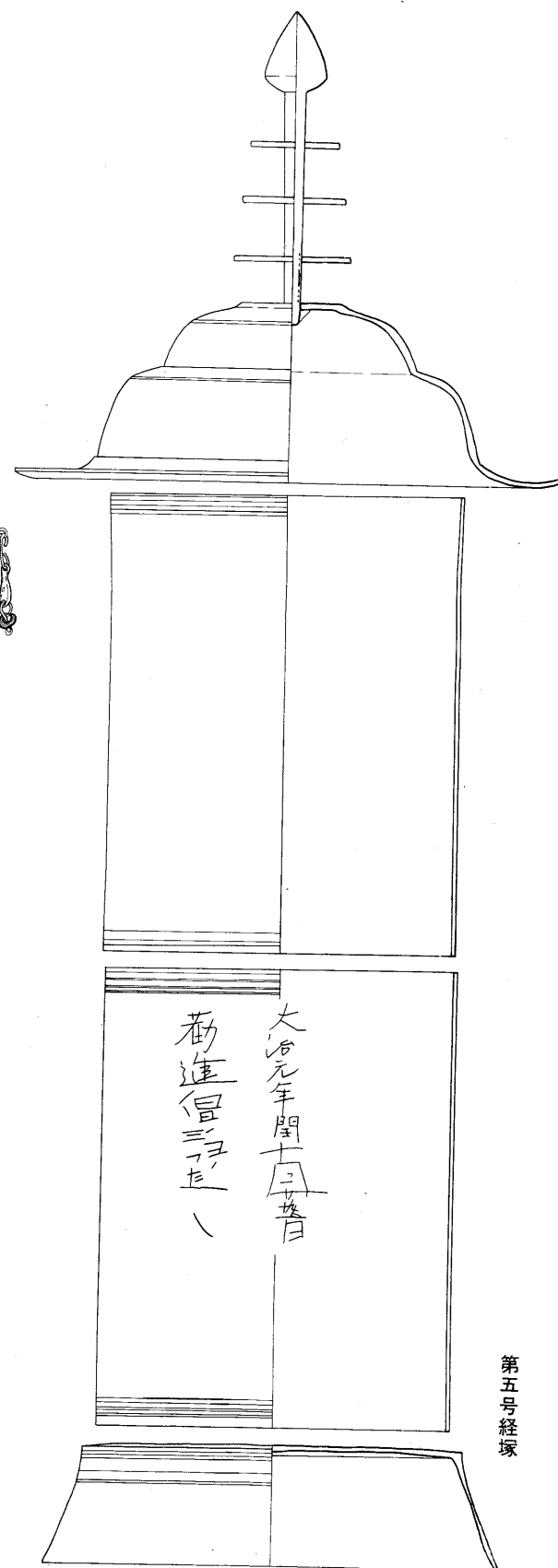
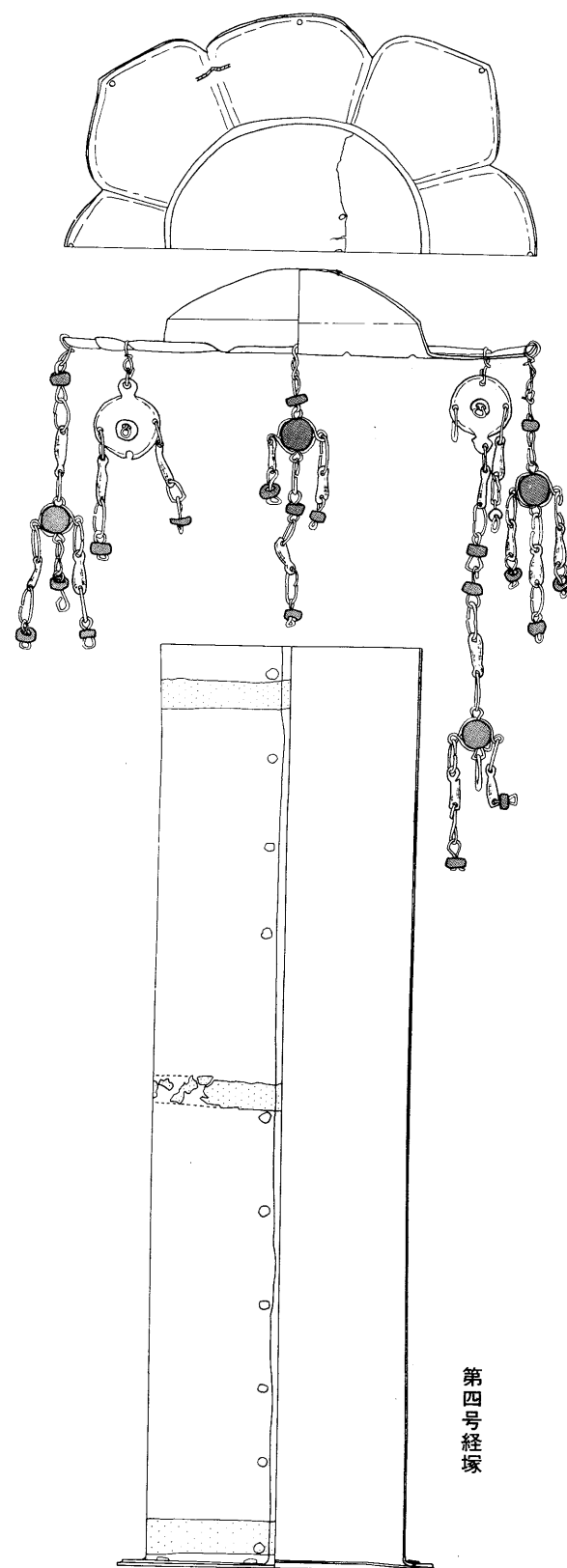
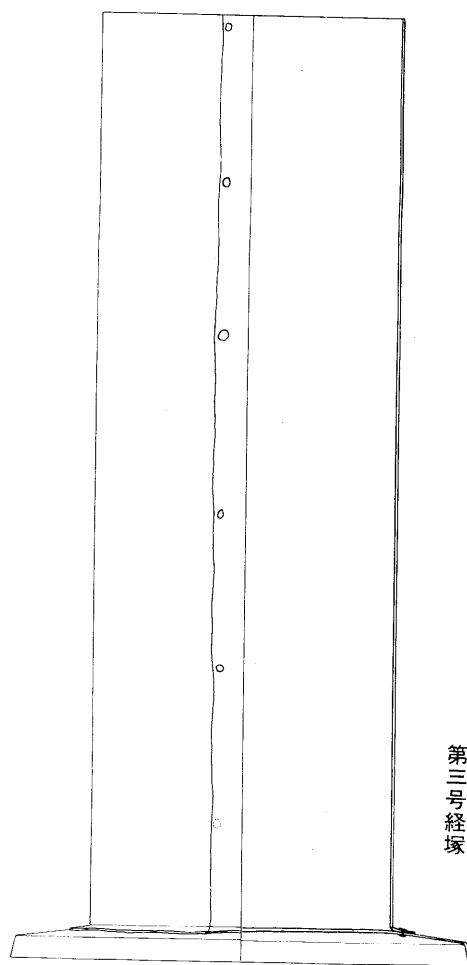
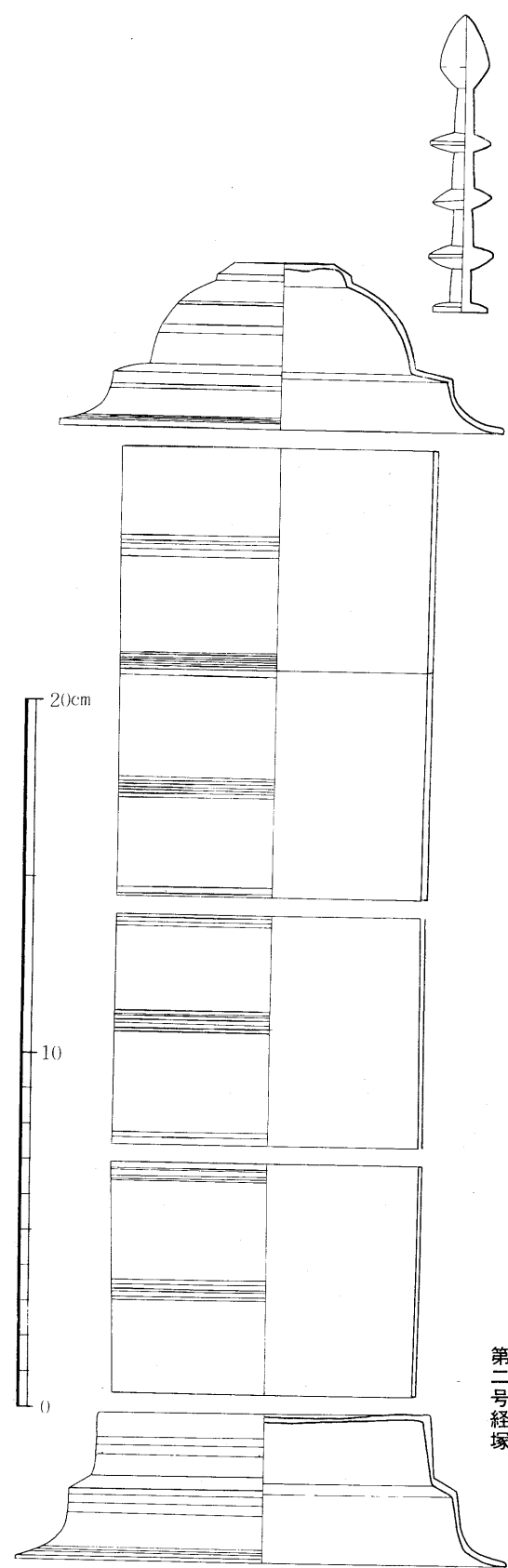
太宰府および筑紫路の史跡として、また、九州最古の佛跡として、いついつまでも、訪れる人々に、信仰の源——ここに流れた時間の永さと、ここに保たれている空間の静けさを語りかける霊域——としての感動をおぼえていただくことを念じております。

今後は、境内の一角の経塚遺跡を、自然の形で開発し、保存し、訪れる人々に、み佛の教えを肌で感じていただくことを願っています。私も、本書の完成を機会に、さらに住職として努力精進をいたしますので、みなさま方の、いっそうのお力添えを願ってやみません。

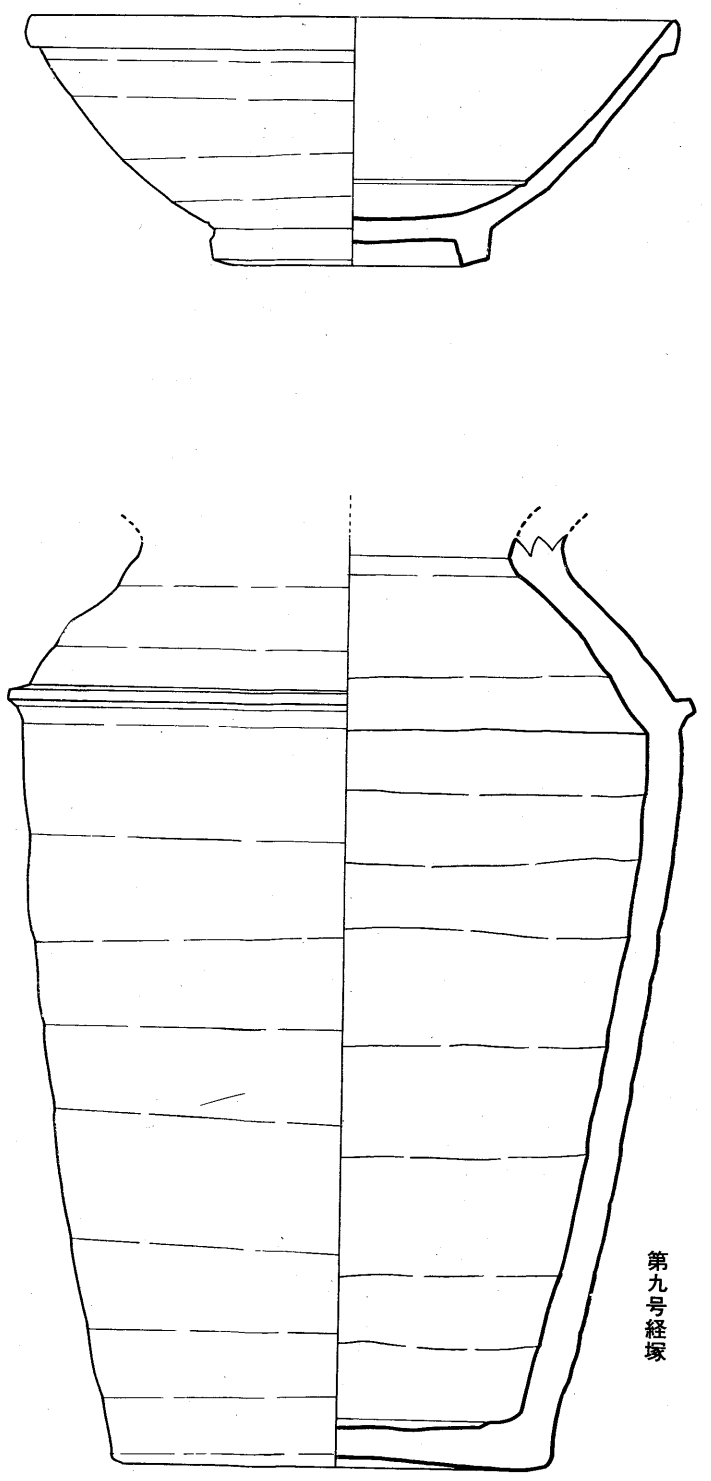
昭和四十五年二月

武蔵寺

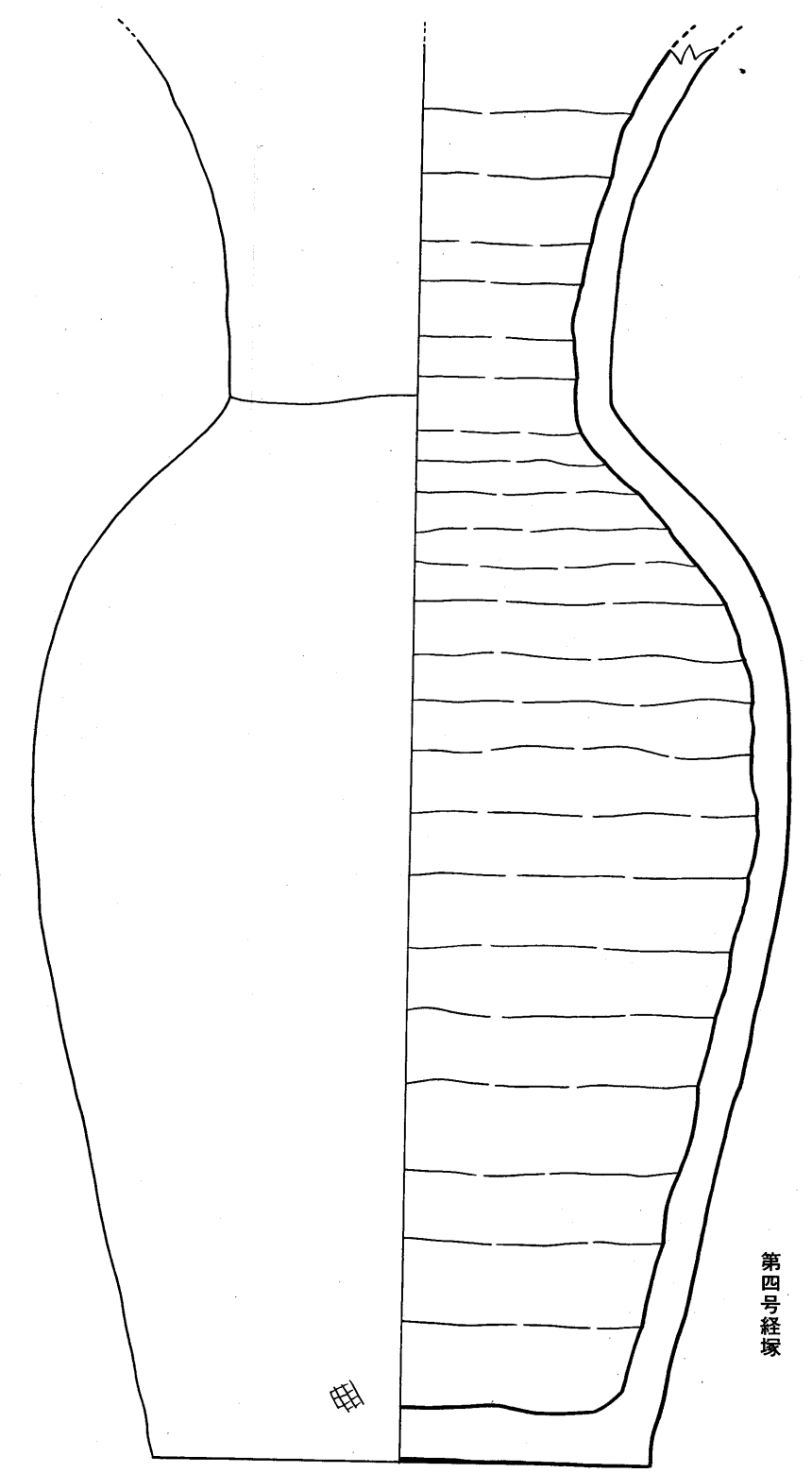
住職 井上 亮 範



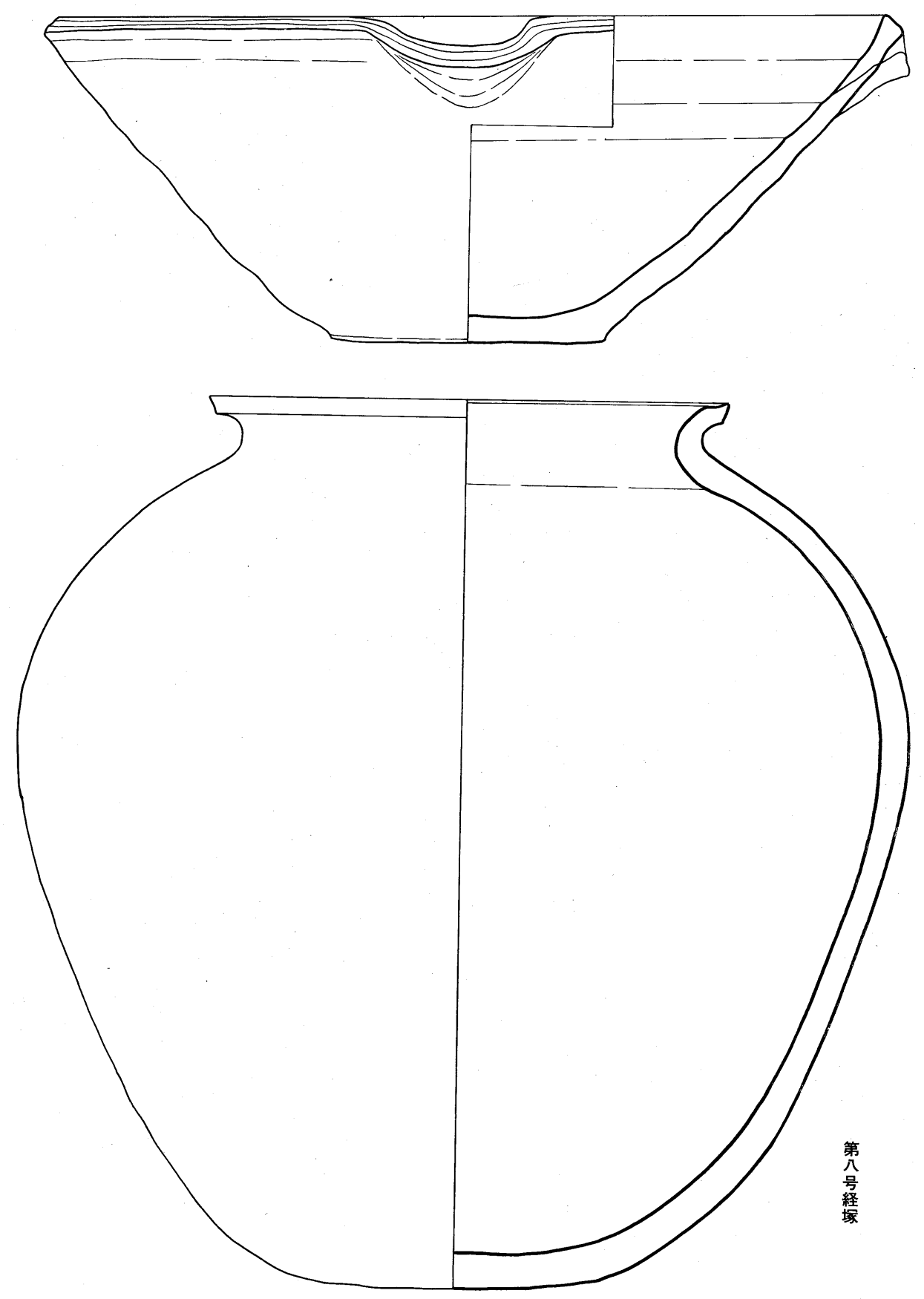
第22図 武藏寺経塚発見経筒実測図集成



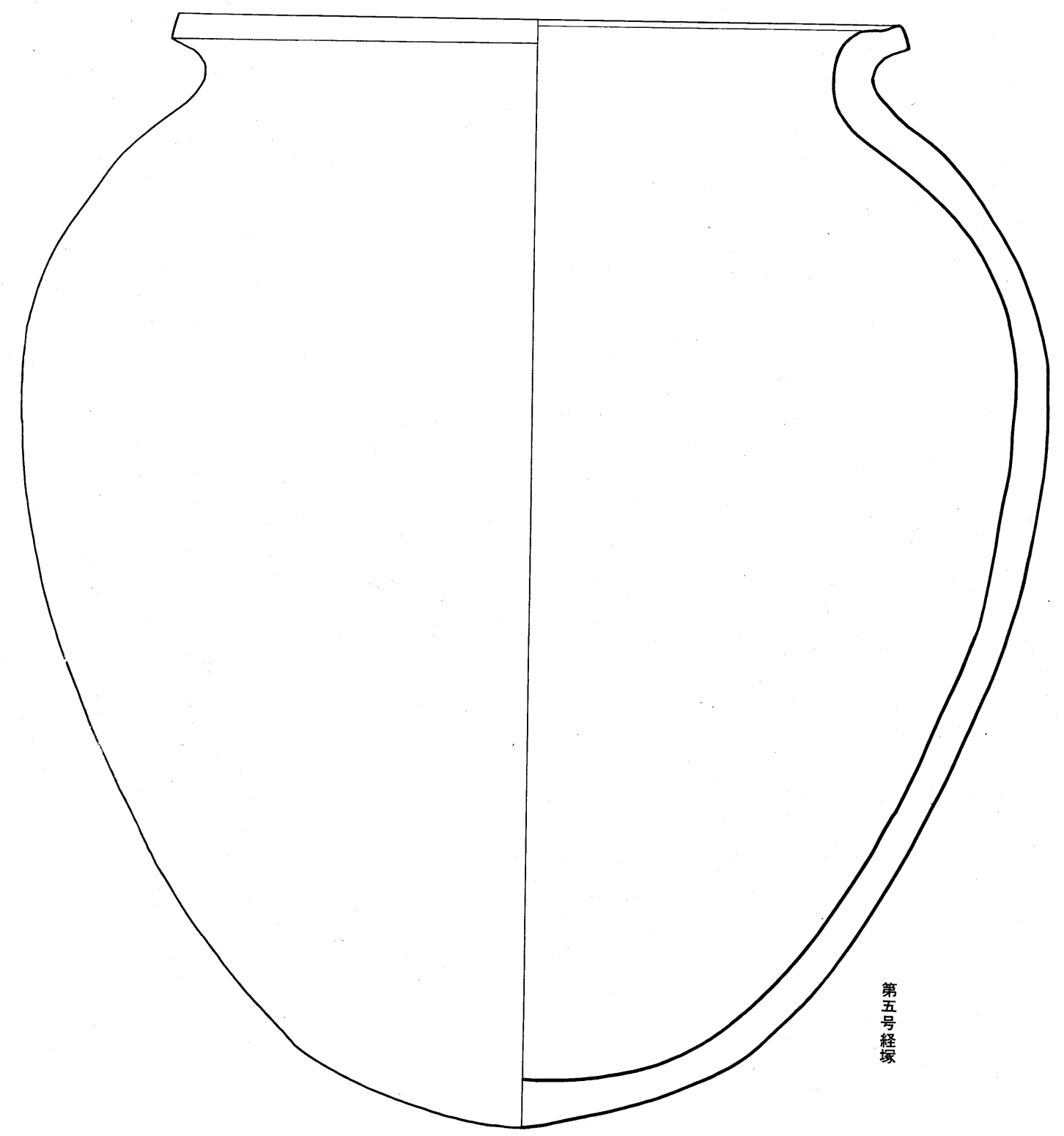
第九号経塚



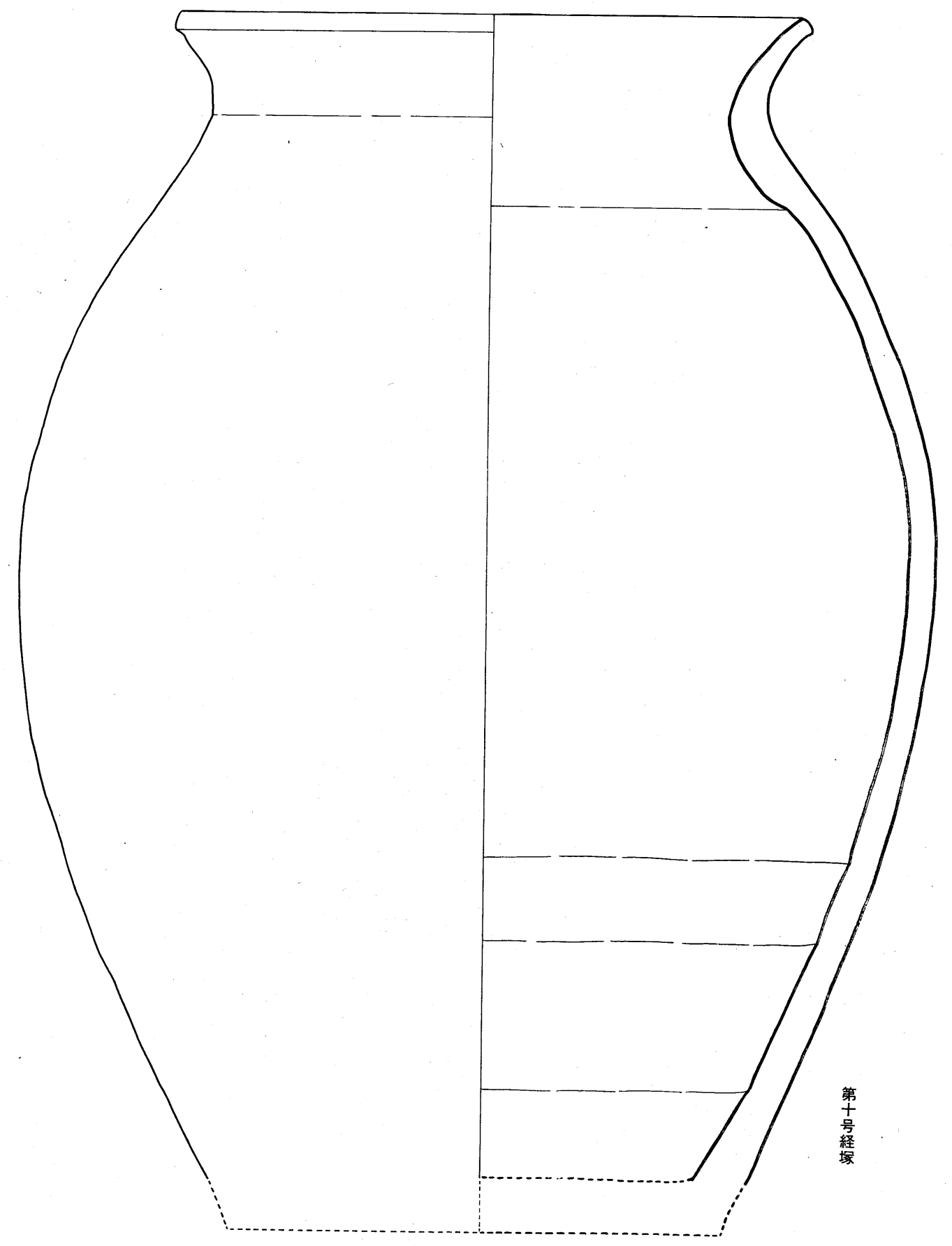
第四号経塚



第八号経塚



第五号経塚



第十号経塚

第23図 武藏寺経塚発見外筒実測図集成

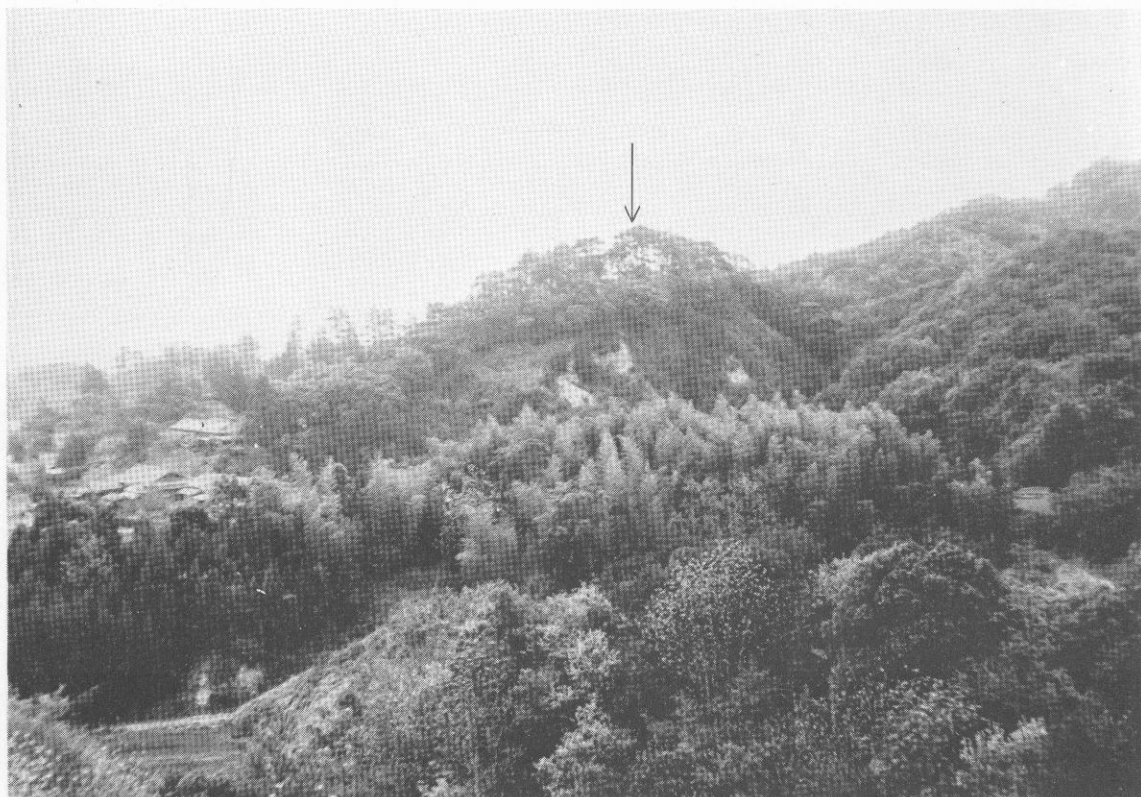
図

版

PLATES



西側上空より望む（○印武藏寺境内、↓印経塚）（西日本新聞社提供）



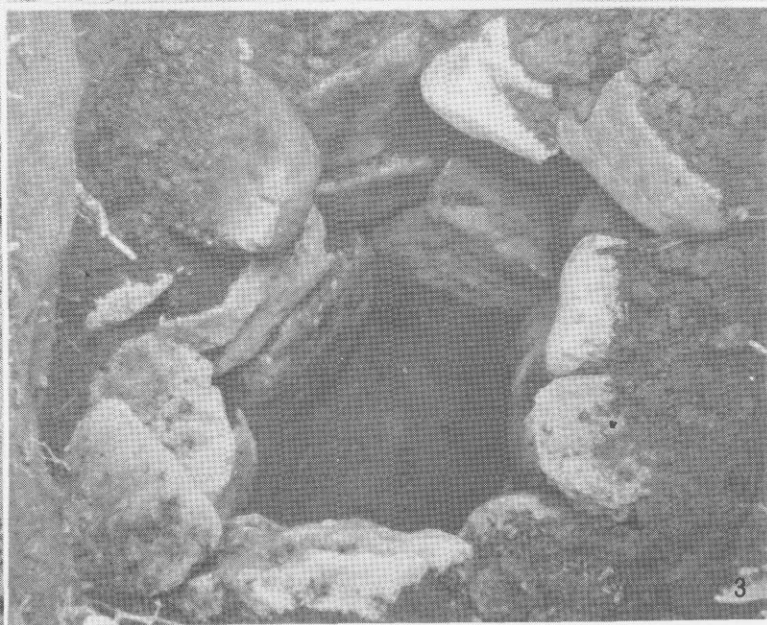
遺跡遠望

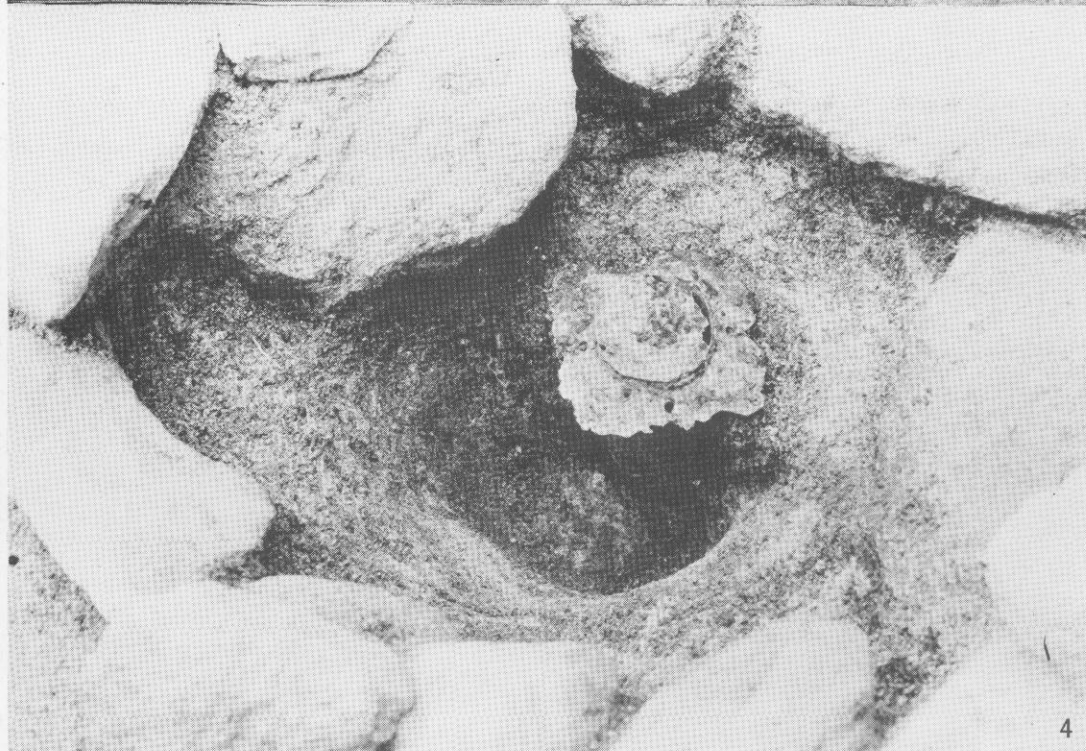
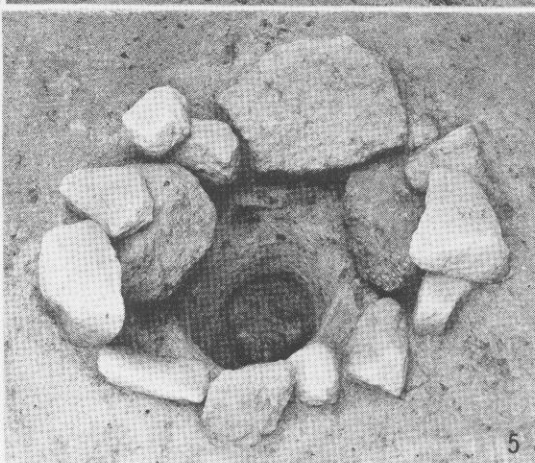
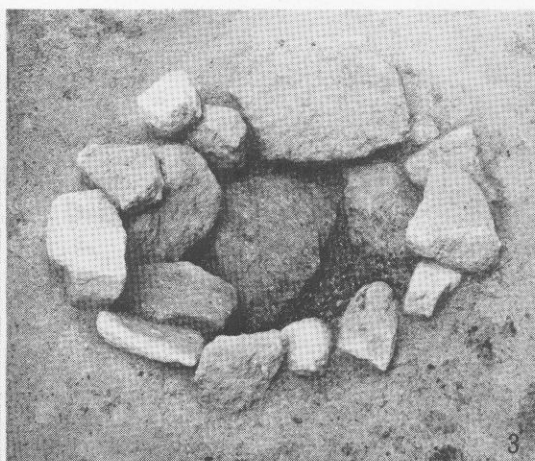
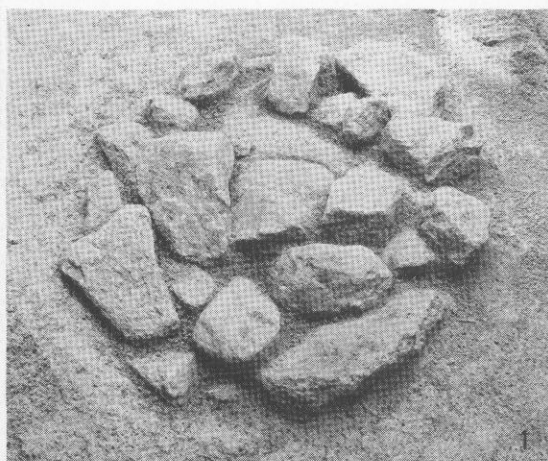
(北側より望む)

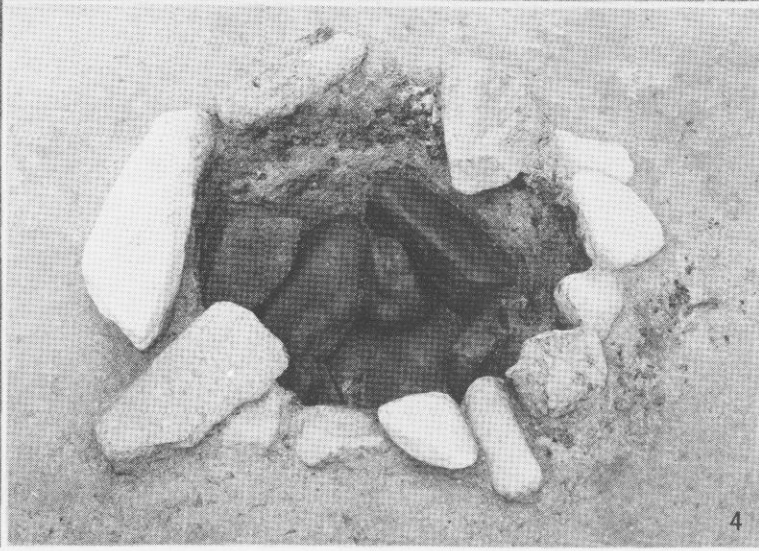
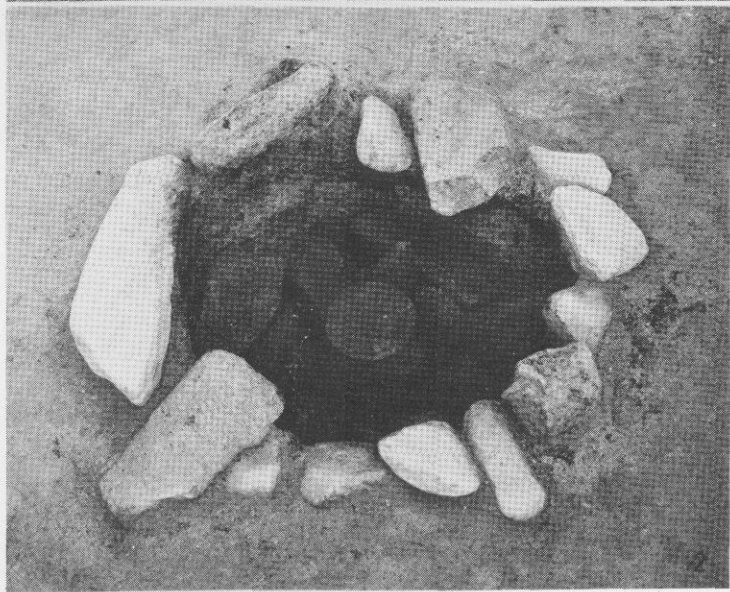
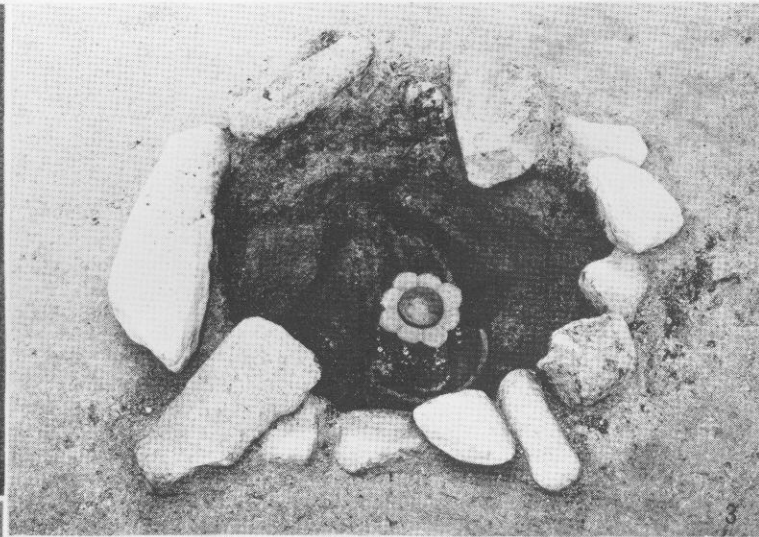


経塚の配置(第一～七号経塚)

(北側より望む)

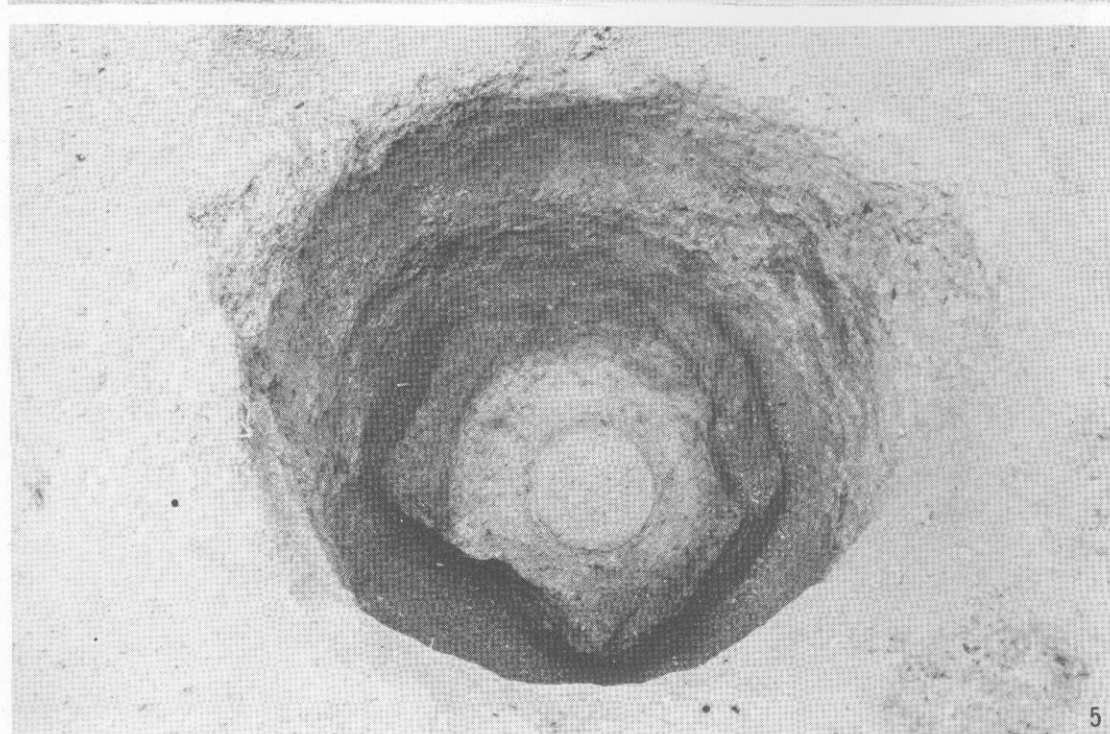
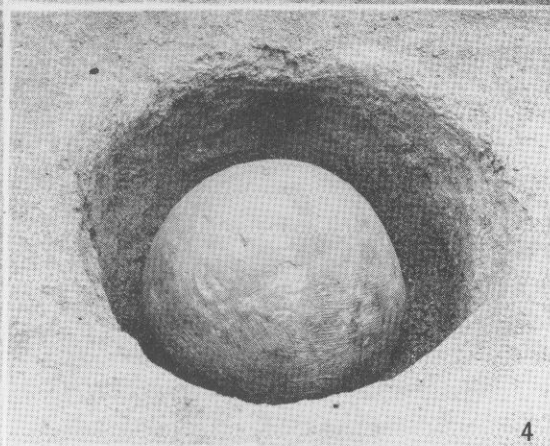
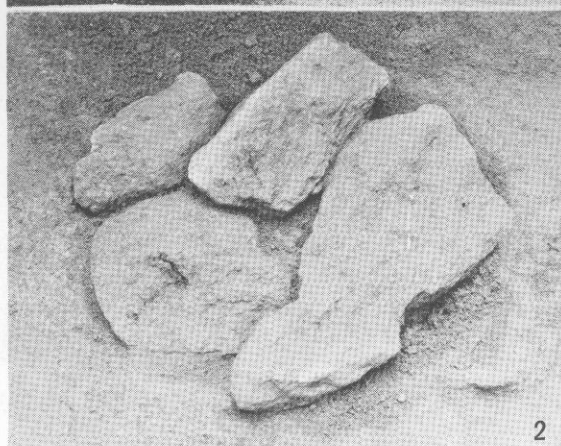
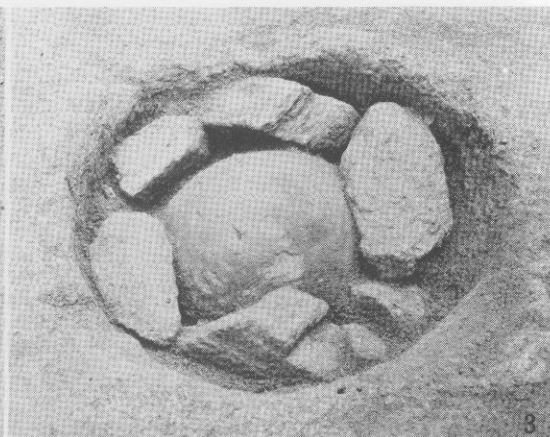
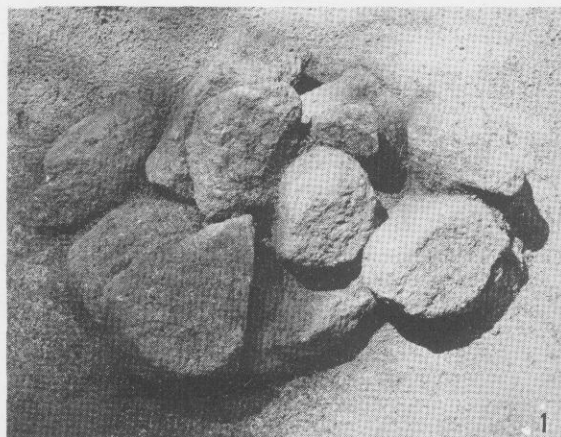








図版第六
第四号終塚、(一)

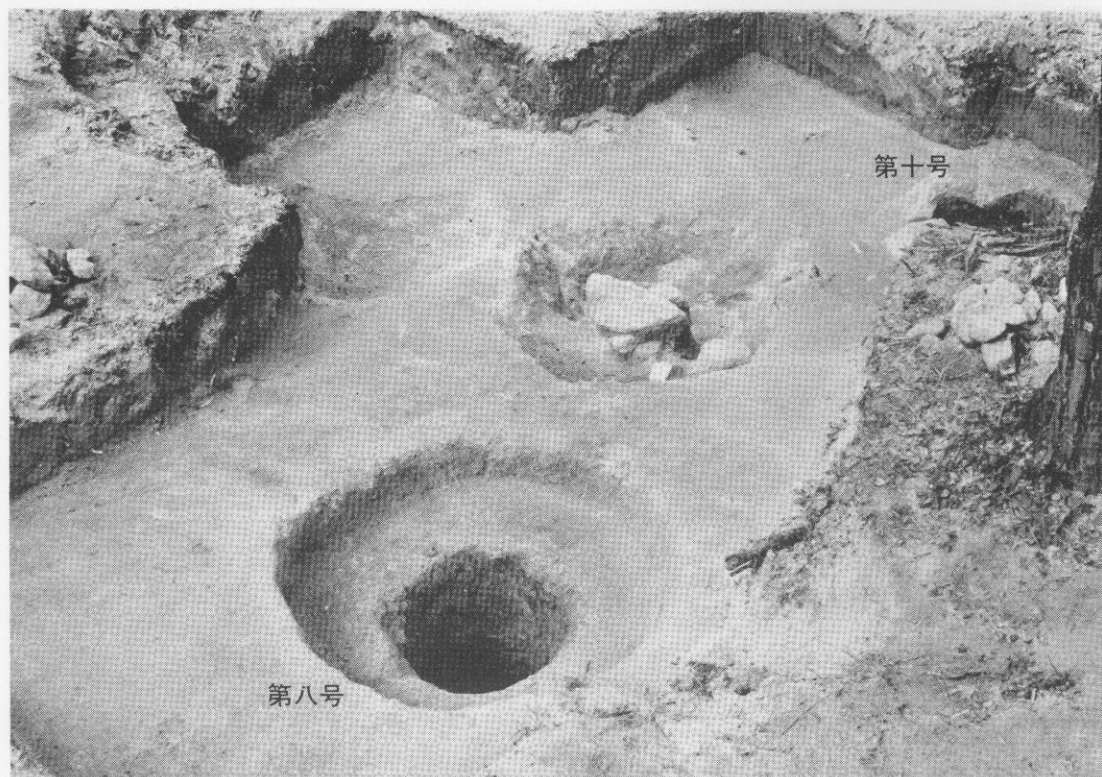


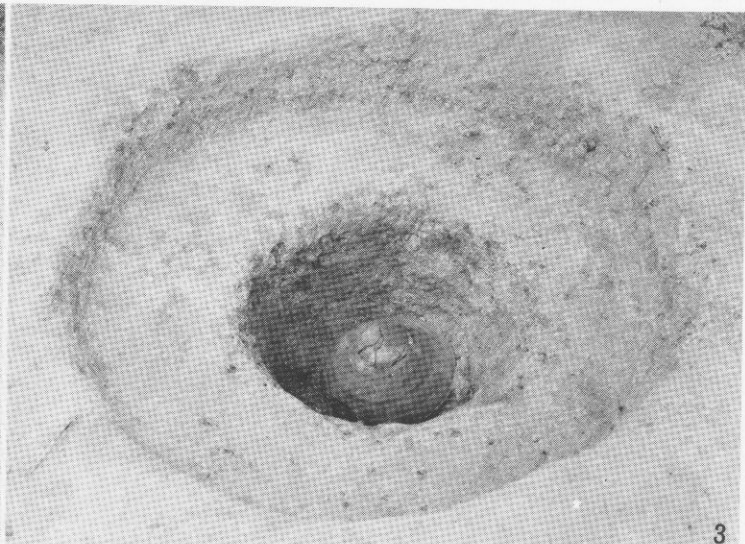
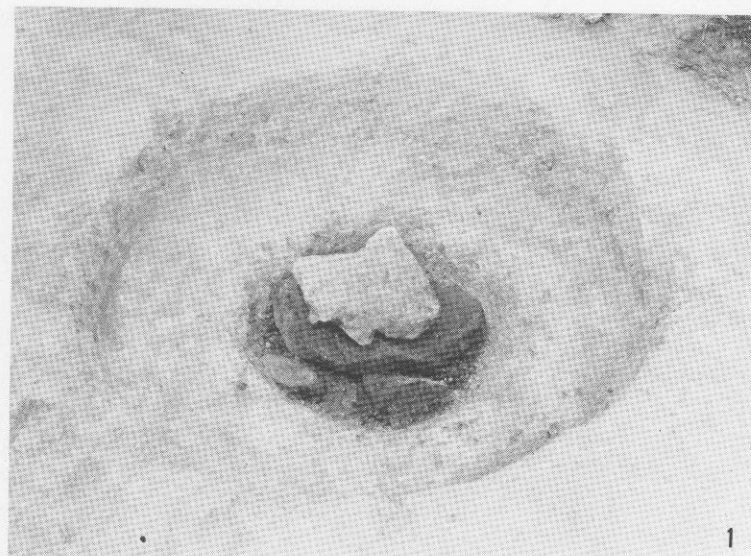


上・第六号経塚

下・第十号経塚







外筒蓋出土状況



外筒蓋をとりぞいたところ

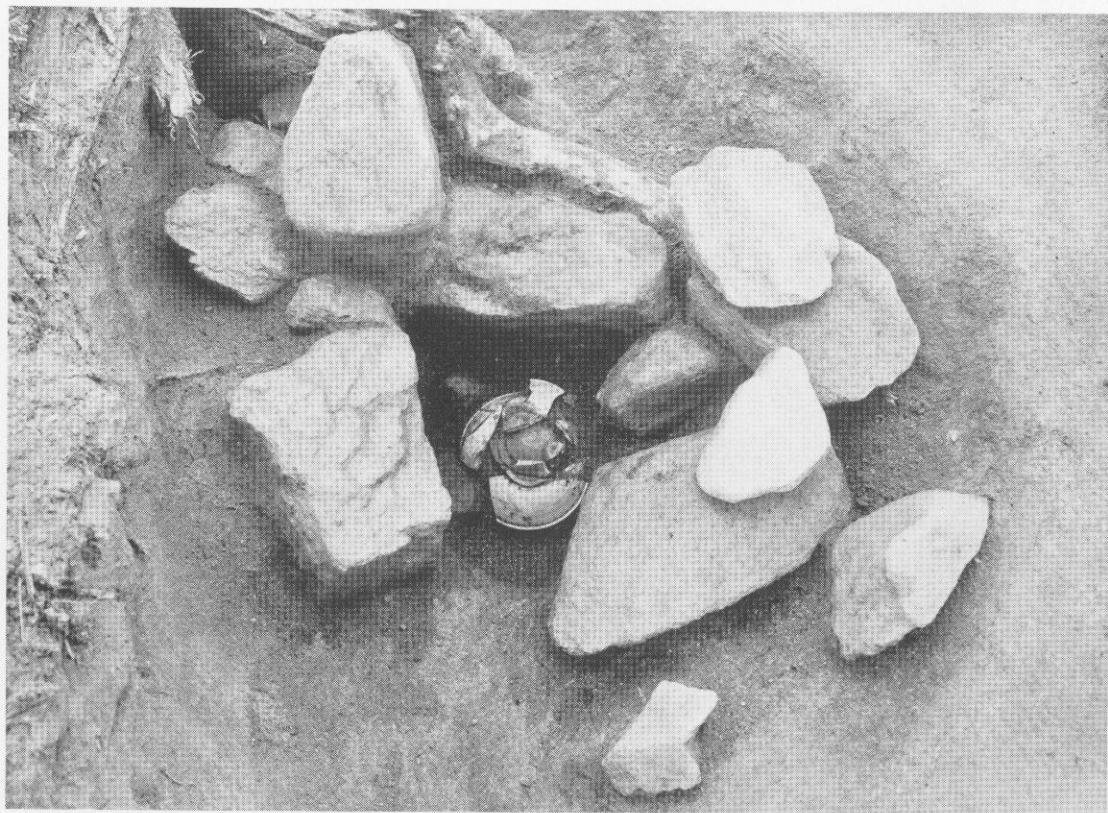


経筒台座と残存する経軸、相輪の出土状況





石組出土状況



天井石をとりのぞいて内部をのぞむ

外筒蓋出土状況

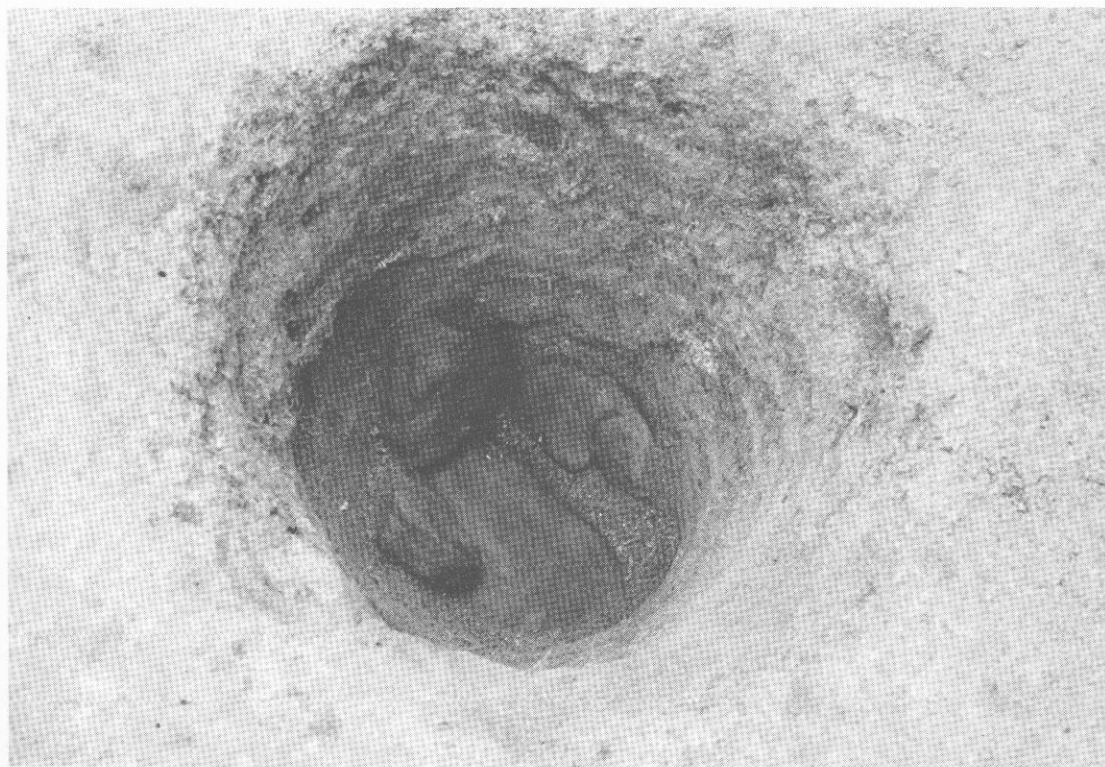


外筒蓋をとりのぞいたところ



経筒蓋をとりのぞいたところ

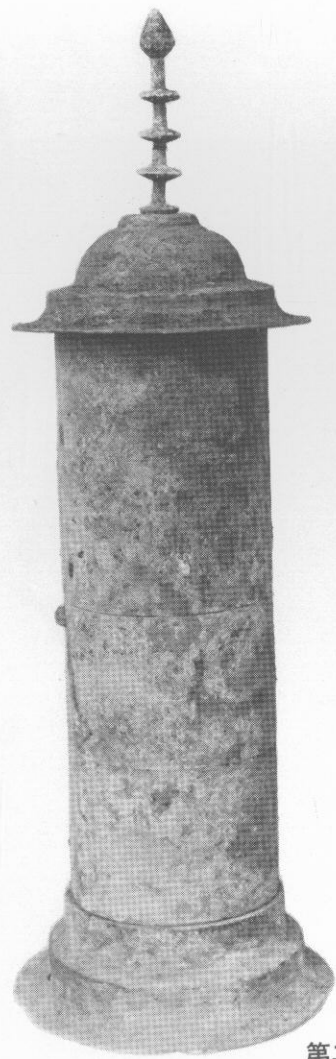




第八号経塚



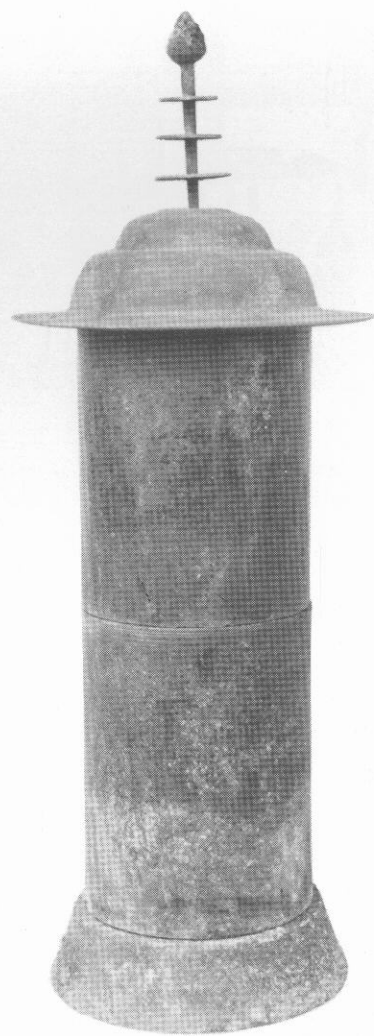
第九号経塚



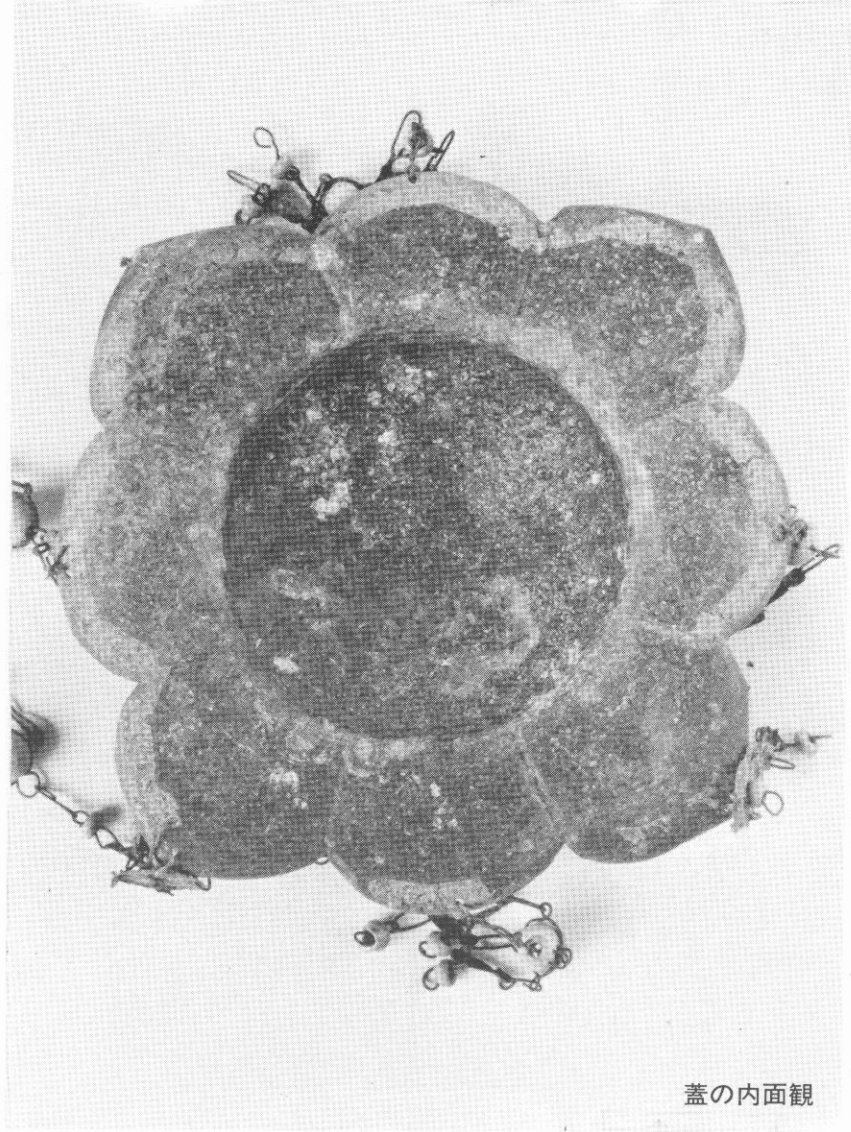
第二号



第三号

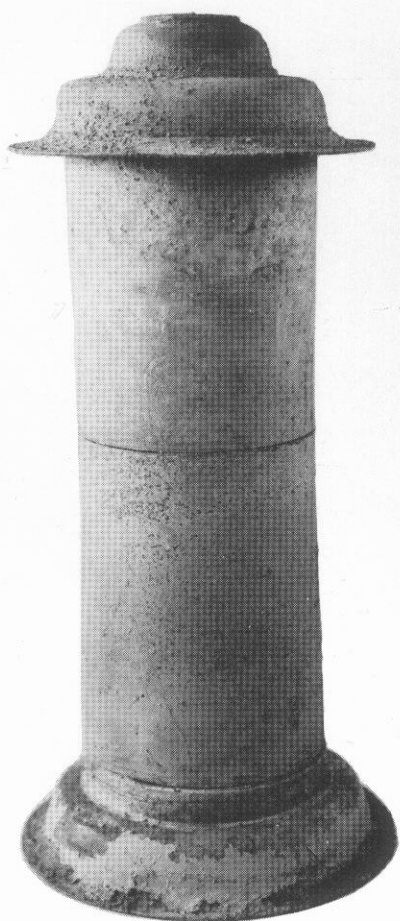


第五号

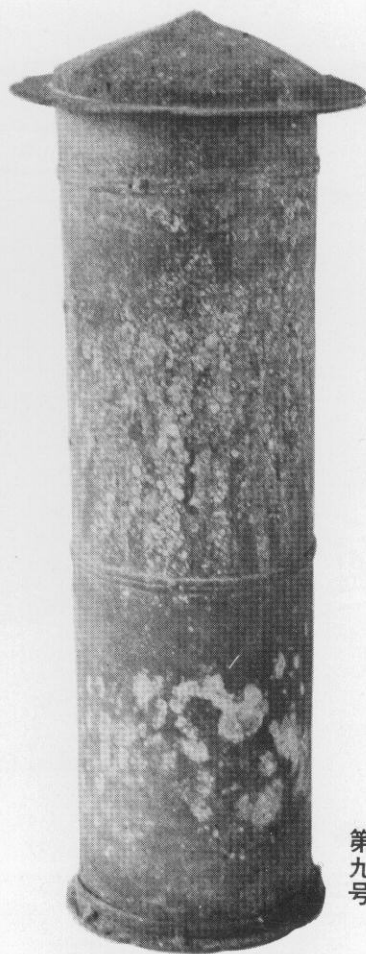


蓋の内面観

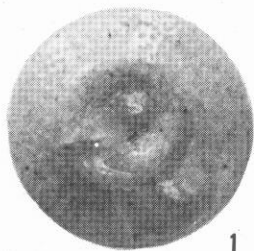




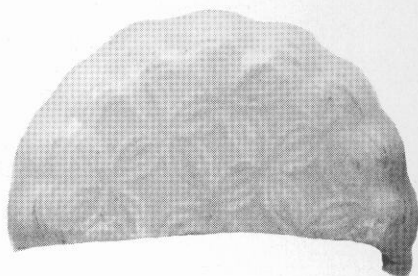
第八号



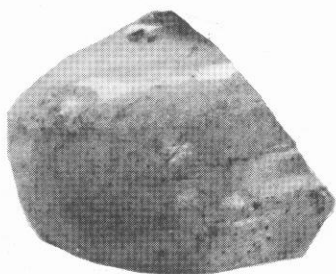
第九号



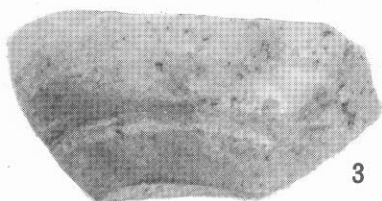
1



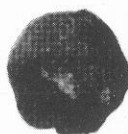
4



2



3



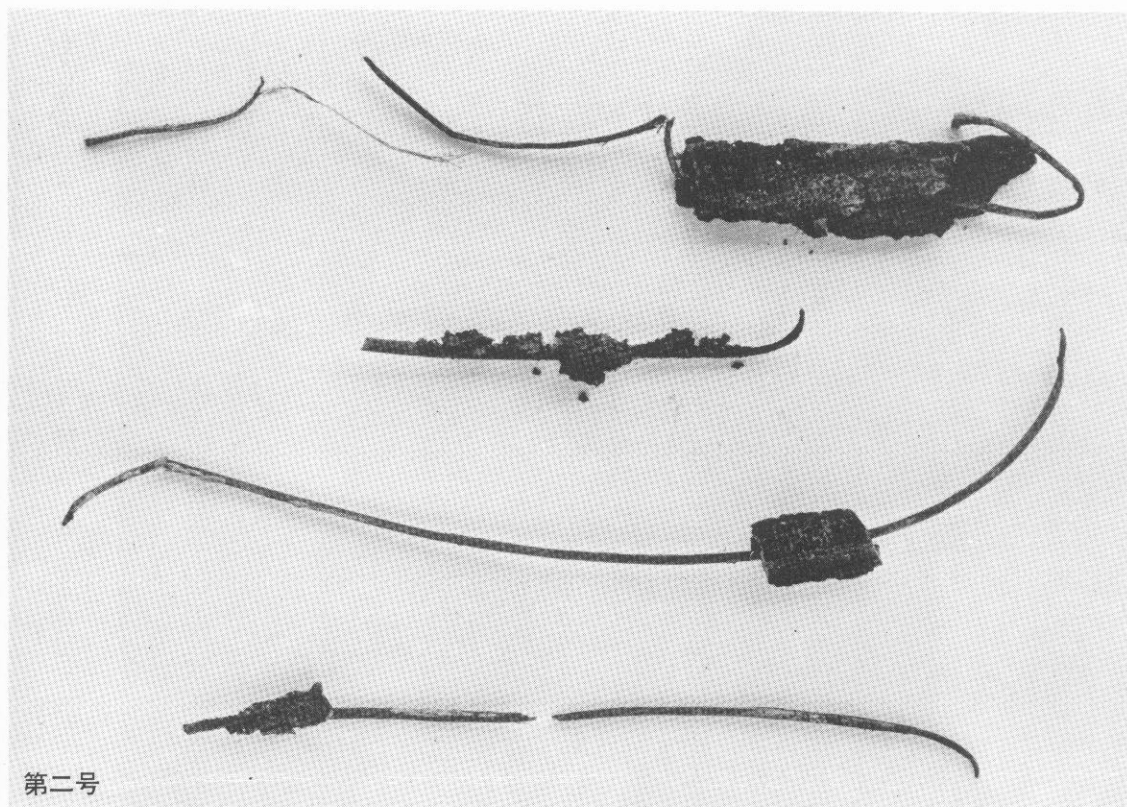
5



6



7



第二号



第四号



第五号



第四号経塚



第五号経塚





武藏寺経塚

昭和四十五年二月二〇日 印刷

昭和四十五年二月二〇日 発行

著 者 小 田 富 士 雄

宮 小 路 賀 宏

発 行 者 武藏寺史編纂会

福岡県筑紫野町武藏 武藏寺

印刷者 福岡市天神一丁目四番二〇号

西 日 本 新 聞 印 刷